シキミちゃんの兄として

喪家の狗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

在り来りにトラック事故で死亡し友達と一緒に転生してしまった主人公。転生先はポケモンの世界。やったね。よーし、友達と一緒にこの世界を満喫するぞ～って思ったけど、僕にはやらなくてはいけないことが出来てしまった。自由度の高い世界。前世の記憶を生かして転生チート（とまでは行かないけど）。

友との旅はその後ね。

追記

シリアスとは無縁のお気楽チャランポラン小説です。

設定がしっかり作りこまれてるのが好きな人向けではありません。

作者はお話を書くのが下手なので内容薄口短めとなります。ご承知おいてね

あと、感性と口調がバグってます。

目　次

第１話　交通事故　みんなで起きれば　怖くない　―――――　1
第２話　タワーオブヘブンなんだね。ヘヴンだと思ってた　―――――　4
第３話　経験者が言うと説得力あるな　―――――　9
第４話　あれって、成功例はあるのだろうか　―――――　15
第５話　君に決めた　―――――　23
幕間　―自力で己を紹介せよ―　―――――　26
第６話　妹編の始まり　―――――　30
第７話　コレはペンですか？　いいえ、兄の指です　―――――　39
第８話　アニメの特訓回、結構好きだよ　―――――　43
幕間　―第１回墓守家オトメの戦い―　―――――　48
幕間　―進化の奇跡（アイテムじゃないよ）　―――――　54
幕間　―学校での邂逅―　―――――　58
幕間　―▽シキミちゃんの欲しがる攻撃！―　―――――　62
幕間　―これだから異世界の宗教は怖いんだよう―　―――――　71
幕間　―技は１日にしてならず―　―――――　79
幕間　―（シ）キミと夏の終わり将来の夢―　―――――　85
幕間　―いやいや、そんな早く出来るわけ　・・・　え、もう完成した？　―――――　90
幕間　―日常の１日を―　―――――　95
第９話　３年後、タワーオブヘブンで　―――――　101
第１０話　遠足の前日、子供は寝ることが出来ない　―――――　108
第１１話　ＶＳ　３色猿３兄弟　―――――　113
第１２話　ＶＳ　博物館の褐色ママ　―――――　119
第１３話　ＶＳ　廃人ロード　―――――　126

幕間　―ＶＳピンクの悪魔―　132
第１４話　ＶＳ　都会の洗礼　137
第１５話　ＶＳ　名前からして芸術家　144
第１６話　ＶＳ　たましいポケモン　148
第１７話　ＶＳ　黒でも金でも人気のモデル　156
第１８話　ＶＳ　ふゆうポケモン　162
第１９話　ＶＳ　トンネルおじさん　169
第２０話　ＶＳ　えちえちぶっ飛びガール　173
第２１話　ＶＳ　俳優になっても安泰仮面　178
第２２話　友共出会いを　183
第２３話　ＶＳ　ゴーレムポケモン　189
第２４話　ＶＳ　後ろの席の奴　194
第２５話　ＶＳ　ジムの仕掛け金かかってるおじさん　198
第２６話　四天王に就任しま……　203
第２７話　ポケリフレ結構好き　210
第２８話　僕も負けるのは好きじゃないけど　219
第２９話　４人揃って、四天王！　223
第３０話　マジコスサフラ　232

第1話　交通事故　みんなで起きれば　怖くない

――某県　某市

僕達3人はちょっとした山道で車に揺られていた。

ハンドルを切りながらチラリと窓の外を見ると断崖絶壁、落ちたら一溜りもなさそうな崖とＳｗｉｔｃｈでポケモン対戦してる助手席の友達。

おい、ずるいぞ。

バックミラーを見てみると後ろに座った友達もＳｗｉｔｃｈを弄っていた。

何2人で対戦してるんだよ。さっきから話しかける度に生返事だったのはそのせいかよ。ちゃんと隣のお前さんは助手をしろよ。人が頑張って苦手な山道を運転してるって言うのに・・・。

僕も後で混ぜろ。

・・・　話を戻そうか。

もう既に全員が就職していて社会人として日々汗水流し忙しかったため中々に予定が合わずにいたのだが今日は珍しくみんなの予定が空いていたので、じゃあ遊ぶか？　ということで遊ぶことになった。

遊ぶと言ってもポケモンセンターに行くだけなのだが。

いや、違うって。

ポケモンが傷ついたから回復に～じゃなくてぬいぐるみとかグッズとか売ってるお店の方。そりゃ本物のポケセンあったら行ってみたいよ。

なんてことを思っている間に前からトラックが近づいてきたようだ。

別にただトラックが来ただけならぶつからないようにすればいいだけなんだけど、少し様子がおかしそうだ。

なんて言うか、

「え、暴走トラックじゃん」

いつの間にか顔を上げてた友達の1人が言う。おい、対戦に集中しろよ。ＴＯＤ狙いか？

嫌われるからやめときなさいな。

そう、ラノベの主人公達が都合良く転生するのに使われているあのトラックだ。

え、なに？　じゃあこれから事故起こすの？

嫌だよ。新車だぞ。この車。

なんてこと考えている間にも、ホントにトラックが近づいてきた。

マジかよ、あれに轢かれたら転生しちゃうのかよと思いながらも僕はハンドルを切り避けようと努力する。そんな抵抗を嘲笑うかのようにトラックはマイカーにぶつかってきた。

車内に衝撃が走る

おいおいおいおい、ヤバいって。マジで洒落にならない。謝礼はあるだろうけど。

え、流石にあるよね。こんなことまでしてるんだ。居眠りでも酔っ

払いでもしっかりしてもらうぞ。

くだらない事を考えている間にも車は軋みながら車道をはみ出すってレベルじゃないくらい飛び出し、

いやもう飛んでいる。

え、飛んでるの!?

こりゃ無理だ。残念ながらポケセンはあきらめよう。

「ごめん、タヒんだわ」

「だろうね」

「心配すんな。少なくともお前のせいではないだろ」

これからタヒぬって言うのになんでそんなに冷静なんだよ。なんて人達なんだ。

あ、ちなみにさっき対戦どっち勝った？

僕は迫りくる大地を眺めながらせめて最期に何か言わなきゃと思い友に向かって言った。

「じゃ、来世出会えたなら」

「おう、楽しかったぜ」

「うん、またね」

また会える確証を持ったかのような言葉を最後に意識が途絶えた――。

第2話　タワーオブヘブンなんだね。ヘヴンだと思ってた

ということがあって僕は結局タヒんじゃって、この世界に生まれたんだけど。

え、唐突すぎる？　ご都合主義？　知らんわ。

――――作者がそうしたいからでしょ。

それに今更赤ちゃんの頃の話なんていらないでしょ。誰がおしっこ漏らした～って話で喜ぶんだよ。小学生か。

そんなわけで5年。5年経ちました。

5年も経つと色々出来るようになるもので、本を読んで調べたり、テレビを見たり、外に出てみたり。

こうして僕の5年間で調べて分かったんだけどなんとビックリこの世界はポケモンの世界らしい。

俗に言う異世界転生だね。やっぱりあのトラックかぁ。

ちなみにここはＢＷシリーズの舞台イッシュ地方。ＢＷのストーリが始まる前の世界。

どのくらい前かというと、まだ四天王があの4人ではなかった。あの4人どれくらいから四天王してるんだろ・・・。シキミちゃんとか好きなのにな・・・。

一緒にタヒんでしまったであろう2人もどうせこっちに来て発狂して狂乱して踊り狂ってるでしょ。

なぜわかるかって？
僕がそうしたからだよ。
あの時は赤ちゃんだったからただ泣いただけだったけど・・・。
普通に考えたらみんな大好きポケモンの世界なんて嬉しいでしょ。
まあ違う人もいるのか・・・？　いや、居ない（あくまで個人の感想）。
とりあえず友達については近所にいるなら探したいけど他の町、地方となるとこの世界の成人、１０歳を迎えてからだな。
１１歳だっけ？
そんなことを考えながら僕は日課をこなす。
僕の日課？
それは――
タワーオブヘブンのてっぺんにある鐘を鳴らすこと。
タワーオブヘブンは原作とは違いポケモンや人の共同墓地となっている。僕はそこへ毎日屋上の鐘を鳴らしに行っている。
なぜ僕が毎日ここへ通うのか。ヒトモシが好きだから？
ん、まあそれもある。
メインはまあ、家の手伝いだね。僕の家は所謂墓守で代々墓地の管理や墓荒らし退治（？）を生業としている。らしい。
国からちゃんとお金が出るんだけど、まあ、ポケセンみたいに高くはない。

それでもささやかな幸せで過ごさせていただいてるよ。

そのうちの仕事の一つとしてこの毎日1日3回決まった時間に鐘を鳴らす仕事がある。

本来ならお母さん担当の仕事なのだが、最近お腹が大きくなってきたので、

「お母さんの代わりに僕が鳴らしに行くよ」

と僕が変わった。

僕がそう言ったらお手伝いしてくれたーってすごく喜んでたなあ。

…あ、いや、ママ太ったわけではないよ。

赤ちゃんだよ。まったく、まだまだ二人もお盛んですな。

お兄ちゃんになるんだよぉ～って言ってた。

…ふむ、お兄ちゃんか。

あ、いや。なんでも。

そんなことを考えながら歩いていたら屋上についたので鐘を鳴らす。この鐘を鳴らすとここに眠っている魂が喜ぶらしい。

鐘は子供の僕でも鳴らせるようになっているので、

リンゴーン　リンゴーン

と心地いい鐘が鳴る。

よし、綺麗に鳴らせたな。

さて、早く戻ってこの世界で何するか決めないと。

え？　みんなやってるじゃん。僕も前世ではポケモンのＳＳとか読んでたからわかるよ。

前世の記憶チート……　だっけ？

ガチ勢様たちが転生して前世の知識でチートするやつ。

いいよね、あれ。

僕もやりたい。

僕も前世ではガチ勢とまではいかなかったけど色違い厳選をメインにプレイしていたからね。理想個体とか技構成とかも意識してたんだよ。

対戦しないならそんなの無駄？　所詮観賞用だろって？

うるさいな、どうせだったら自分の好きな子がより良い状態の方がいいでしょ。

そんなわけで多少知識はある。

それに２人もどうせ同じことするだろうからどこかで会うでしょ。

廃人ロードとか、ジムとかリーグとかで。

あと、トレーナーになるならやっぱり相棒は１番好きなポケモンがいいよね。探しておかなきゃ。

そんな下らない（下らないってなんだよ・・）ことを考えながら過ぎるある日、日課の帰り道、どうチートしてやろうかと案を練っていると塔の２階部分で何やら騒がしい声が聞こえた。

トレーナー同士で戦っているのかなとも思ったが、どうやら違うらしい。

怖いって訳じゃないけど（↑ここ重要）恐る恐る近寄って様子を見てみると、

１匹のヒトモシが３、４匹のヒトモシに虐められていた。

第3話　経験者が言うと説得力あるな

いじめってやっぱりどの世界にもあるんだね。
僕も前世ではよく――――
ごめん、やっぱり思い出すと泣くからやめるよ。

ま、まあ、如何なる理由が有ろうとも僕はよくないと思うんだ。
だから人同士の喧嘩や虐め何かは見て見ぬふりなんてしない。
止めに入る勇気も力も無いから直接ではないけど・・・。

それでも何かしらの努力はする。誰かに助けを呼ぶ、警察を呼ぶ・・・は少し大袈裟かな？

まあ、人間相手にはその位する。

だから、僕の1番好きなポケモン、その子ども（？）ともなれば、

――――何がなんでも止めに入る。

虐められる痛みなんて文字通り痛いほどわかるからね。虐めを止めるために負う怪我なんてあってないようなもんでしょ（震え声）。

よし、行くぞ！　ほら、今！　さあ、行くよ！　はい、3、2、1！　ほらほらほらいまいまいま！　う、動け！　動いてこの足！　動け動け動け動け！
え、行かないのかって？　い、いや、行くよ？　び、ビビってねぇよ!?

目の前でヒトモシちゃんが痛めつけられてるんだぞ！　お前が今

行かなくて誰が行くんだ！　周りにいるトレーナー？　いや、原作にいた野良トレーナーさん達も毎日いる訳では無いからね。
そりゃそうでしょうよ。その人達だってお仕事とかあるんだし、トレーナーだけで食っていけるのなんてホントにひと握りなんだぞ。
おい、今ストーリー余裕だったんだから俺余裕だよとか思ったヤツいるだろ。違うからね。それはただのレベルゴリ押しだし、そんなに自信があるならランクマ潜ってみなさいよ。
それの上位勢様がトレーナー業だけで食って行けると呼べる人達だ。

…　まあ、僕が言えたことじゃないけどさ。

ってそんな自称ポケモントレーナーってイキってる奴らの事はどうでもいいんだよ。

――――――問題は今も攻撃の手を辞めてないヒトモシちゃん達に無計画に突っ込んで行った僕の事だよ。
いやね、その攻撃の熱いのなんの。

進化前なんだし行けるだろって行ったんだけど、やっぱり進化前でもポケモンはポケモン。
よりゃ強いですよねぇ。

と、とりあえず話を聞こうか。（スーパー異世界人）

「ね、ねぇ。ちょっと、どうしたの？　いや、熱い熱いちょ、やめっ、やめてーー!?」

僕が虐められてるヒトモシちゃんを抱えて庇っているからなのか、僕にまで「はじけるほのお」が着弾してる。
いや、めっちゃ熱いわ。

火傷何ヶ所もしてるだろうなー。

・・・ん？　なんで僕蹲ってるんだろ？　・・・そ、そうじゃん。

突然思い出したかのように立ち上がり、ヒトモシちゃんを抱えたまま走り出した。なんか結婚式のアレみたいだね。わかる？　あれ、元カレみたいなやつが来て花嫁持ってくやつ。

何とかその場から逃げ出して1階と2階の間を繋ぐ階段に座り込む。

い、いやー。あぁいう窮地に立たされると冷静な判断ってできないもんだね。勉強になるわー。

ふぅ。と息を付き、怪我をしてるいるであろうヒトモシを見てみる。怪我はポケモンセンターー・・・

今度は本物だよ。

ポケセンに行けば怪我等は正しい処方で治して貰える。もし近くにない場合は道具のキズぐすり等で応急処置する必要がある。そうすれば後遺症も防げるし、ポケモン達への負担も減る。幸いキズぐすりは持っているから――――

ってあれ？

この子色違いじゃん。

キュピーン　～☆

いや、今光られても・・・

てかそれどうやってんの？

話を戻そうか。

そうか、この世界にもやっぱり色違いっていたんだな。

色違い。突然変異とかって言われてた気がする。アルビノみたいな感じなのかな？

人間同士でも自分とどこか違う人を不用意に避けたり、怖がったりそれこそ虐めたり。

人間同士でもあるんだから他の生き物でもあるんだろう。

キズぐすりを患部に吹きかけて手当する。

それはポケモンも一緒。形は似ていてもやっぱりどこか違う。それが怖かったりする。

元の世界の童謡の　みにくいアヒルの子がいい例だろう。

でも、今となってはちょっと昔の記憶だけど、アニメのポケモンでもボクレー・・・ だったかな？　色違いが普通に同族の群れの中で生活をしていた。

何処かで受け入れられない所があれば、逆に受け入れられる所もあるのか。

――――やっぱり、長ったらい話は性にあわない。

この作品にはシリアスタグも着いてないからね。

端的に言おうか。

「・・・ ヒトモシちゃん、もし行くところがないなら、僕のとこ、来る？」

(!?)

僕がこの子の受け入れられる所になる。

ヒトモシはビックリした反応を見せたかと思ったら、じっと考え始めた。

・・・じっくりと独りで考える必要もあるだろう。

そう思い少し席を外そうと腰を浮かせた。

と思ったら服を引っ張られて戻された。何その仕草可愛いんだけど。

「どしたの？」

なるべく優しい声で聞いてみる。

「・・・モシッ。モシモシ！」

何か決意のこもったような目でこちらを見て訴えてくる。

そうか、なるほど。わかったわかった。完全に理解したわ。

――僕が何も理解できなかったってことを。

その考えが通じたのか少しガックリとする。

そんな姿も可愛い。

あれから数十分間ミッチリと自分の考えを教えこまれた。まあ、全然理解してないけど。

でもそれでようやくわかったことがひとつ。

「一緒に来る？」

「！　モシッ！」

うん、今度こそわかった。今のは肯定でしょ。・・・　え、合ってるよね。合ってるってことにしようか。

「よろしく、テラー」

前世でも色違いのシャンデラさんにつけてあげた僕お気に入りの名前を付ける。

満足気に頷く。

気に入ってくれた様で何よりだよ。

そして、優しくヒトモシ――――否、テラーの手を取って語りかける。

「僕サフラ」

あ、そういえば僕の名前サフラって言います――――

第４話　あれって、成功例はあるのだろうか

みんな、動物は好きかな？
僕は好き。

じゃあ、捨て猫って拾ったことあるかな？　僕はなかったけどテレビで見たことはある。

テレビとかで小学生くらいの子が猫を拾ってきて家で飼ってもいいかとお母さんに聞く。

答えは、

「ダメよ」

といわれる。

いや、「いいわよ」のおうちもあるだろうけど、家には家の事情があるからね。

家で飼えないことが判明してしまった。

なら、その小学生は次に何をするか。

コッソリ飼う。

そのためには自分の服の中に入れて自分の部屋に運ぶ必要があるのだ。

そうすりゃ完璧、ばれることは無いだろう。（ガバ自論）

バレるとしたら、

「不自然に膨らんだそのお腹、なに？」

これだ。

母親の鋭いまでの洞察力で瞬時に見抜かれ

――――ってこんな長々話してる場合じゃない。

なぜ今この話をするのか、わかった天才はいるだろうか。

そう、

「で？　なんなの、そのお腹？」

僕が同じ立場だからだＹＯＵ！

事の発端は前回話した通りヒトモシちゃんことテラーちゃんと友達になったことだ。

とりあえず家に行こうと思い家に呼び、家まで来たところで思いとどまった。

もし、だめって言われたらどうしよう・・・。

そんなこと言われてから考えろ？

…あ、そうすればよかったのか。

――頭がよくない僕はお腹を膨らませて凸ってた。

で、秒でバレた。

「で、なんなの？」

凍てつく視線で問われる。

「え…。お、お母さんの真似？」

咄嗟に答える。

「あら、そう。可愛いわね。…で、誰が産まれるの？」

効果がないようだ…。

「ふ、太ったの…かも」

「あんたそんな食べないでしょ。みんな心配してるのよ」

む、それに関してはほんとに申し訳ない。

でも今はその話じゃない。

「も、もともとこんなだったよ…？」

「なんか光ってるけど？」

あ、ほんとだ。テラーちゃんの奇麗な炎が透けちゃってる・・・。
えー、めっちゃ綺麗じゃーん。
いや、それどころじゃない。今は打開策を考え・・・
られないからしょうがない正直に言うか・・・。
「えっと。この子なんだけど・・・」
パーカーのチャックを開けてテラーを見せる。
「あらヒトモシ？　トレーナーになりたいの？」
「え、あぁ、うん」
「なーんだ、ヒトモシならいいわよ。ヒトモシちゃん、この子のことよろしくね？」
え、いいの？
・・・逆に何ならダメだったんだろ。
あ、あれ？
あっさりＯＫ？
トレーナーになるにあたっての決意表明とか考えてたんだけど・・・。いらない？
・・・あ、そう。
・・・じゃあなんだったんださっきまでの努力は。

という事でね。
早速ポケモンセンターに行こうと思う。
テラーの怪我をちゃんと治すっていうのもあるけど、未成年ポケモン所持のため保護者同伴の元少しばかりあるんだよ。
その、面倒な説明とか。
ポケセンの利用規約とか・・・。
なんか思ってたのと違う気がするけど、まあ、いいや。
てなわけでさっきからお父さんの準備終わるのをずっと待ってるんだけど、全然来ない。
なにやってんのさ。
因みにその間テラーはずっと抱っこされてる。だって離れようとしないんだもん。しょうがないよね。うん。しょうがない、しょうがない。
「モシ〜？」
かわいいな〜？
テラーはもうすっかり良いみたいでご機嫌だけど、やっぱりちゃんと治してあげたい。
だから早く来て〜。
とか思ってたらやっと来たみたいだ。

もー、遅いよのひとつでもボヤいてやろうと思ったんだけど、完全に固まってしまった。

何故か、

当然のようにお父さんじゃなかった。

じゃあ誰か、

「毎度お馴染み、ボク。ボールガイだボルよ～！」

――野生のボールガイが現れた！

なんでボールガイ!?
まだ原作前だぞ!?
しかもここイッシュ地方だぞ!?

なんて、冷静な判断もできる訳もなく・・・。

うわっ!? ビックリした!?

▽サフラはどうする？

な、なんだよお前ェ!?

▽サフラはビビっている！

いや、ビビってねぇから！

「素敵なボールをあげるボルよ～」

▽ボールガイはムーンボールを繰り出した！

痛っ!?　…　くないか技じゃねぇじゃん。

おシャボじゃん。

え、何くれんの？

ありがとね…。

ご、ゴメンね怒鳴ったりして。

あ、心の中で騒いでるだけだった。

「あ、ありがと」

お礼は大事。口数の少ない僕でもそれくらい（最低限度）の事は言える。

やったムーンボール貰ったよ。

「ムーンボールは、月の石で進化する…」

いや説明とかいいよ。

捕獲率とか関係ないし。

だってもう勝手に入っちゃってるもん。

はい、カチッとね。

テラーちゃん、ゲットだぜ！　って？

やんないよ恥ずかしいし。

じゃ、テラーちゃんは回復とか手続きとか有るからもうちょっと中に入っててね。

そのあと普通にポケセンへ行き回復してもらった。

・・・　手続きは親にしてもらったけど。

それじゃテラーちゃん。

改めてよろしくね。

――――――あ、ポケセンの中では特に何も（色違いのヒトモシと珍しいムーンボールの存在に驚いたくらいで）無かったからオチがない！

第5話　君に決めた

――――目が覚める

（ここ、どこだろ）

辺りを見てみると、建物の中なのだろうか。

石の壁があって全体的に少し薄暗い。

この子達にとっては過ごしやすい環境なのだろうが、

（こわい）

無理もない。

突然目が覚めたと思ったら知らない場所、そんなところに一人で、

（あ、同族がいたから少し話を聞いみようか）

運がいい。

本能的にあの子たちは自分と同じだと思って近づき、声をかける。

「あの、すみません」

「ん？　どうしたんだ、、、ってお前、『異端者』じゃねぇかよ！」

「ほ、ホントだ！　お、俺初めて見た！」

ポケモンたちの中の常識なのだが、色違いやその他の突然変異、デルタ種は「異端者」と呼ばれている。

昔はただ珍しいだけだったけど、ある時を境に人間たちが「異端者」を探し始めた。

理由は簡単。珍しいから。

そのせいで「異端者」を含んで行動していた群れが襲撃され全滅した。「異端者」を捕獲するのに邪魔だったために。

それ以来最悪の象徴として恐れられている。

残念ながらこのヒトモシちゃんは生まれたばかり。だれにも教わってないので知る由もない。

「やめろ！　こっちにくるんじゃねぇ！　あっち行け！」

「そうだ、そうだ！　こっちに来んな！」

その言葉を合図に一斉に攻撃を仕掛ける。ヒトモシたちにとってはただの防衛行動なのだけど、

「いたっ!?　や、めて・・・」

被害者にとっては苦痛でしかない。

生まれたばかりで右も左もわからない状態。そんな中見つけた自分と同じ形をした同族。その同族からの攻撃には心も痛むだろう。

なぜ攻撃されなきゃいけないのか。自分が何をしたっていうんだ。

何もわからず考え込んでしまう。

だけど体力の限界も近い。ここはひとまず引こうと考えが出た。

そんな時だった、

「ね、ねぇ。ちょっと、どうしたの？　いや、熱い熱いちょ、やめっ、やめてーー!?」

何も考えてなさそうな男の子が一人で飛び出してきたのは。

その男の子はヒトモシの攻撃をかばって身を挺し、

ヒトモシを抱きしめた。

（――あ。

あったかい。）

ほのおタイプの攻撃じゃない。心まであったかくなるようなそんなぬくもりを感じた。

男の子はヒトモシを抱きかかえて走り出し、階段の途中に腰掛けた。

この日のことをヒトモシは一生忘れることはないだろう。
「僕のところ来る？」
ほかの人からして見ればただの出会い。
「ふぅ！」
ただヒトモシからして見れば、
――よく頑張ったね
――怖かったでしょ
――もう大丈夫だよ
「よろしく、テラー。……　僕、サフラ」
運命の出会いなのだから。

幕間　―自力で己を紹介せよ―

少し遅くなった気がするけど自己紹介とかその他の説明するよ。
（時間稼ぎとも言う）
先ずはこの世界について少し詳しく。
前にも言った通りこの世界はＢＷ時の原作前。他の地方との時差（？）がどのくらいかは知らないけど少しばかり前だと思う。
あと、当然のように言語は日本語では無かった。
当たり前だよね。
国どころか世界が違うんだもん。でもこの世界における言葉による国境は無いらしい。
いい世界やん。

逆に友を探す時には日本語使おうか。
な○う主人公もそうしてたしね。

時間については前世と全く同じ。祝日が少し違うくらいかな？
あと、どういう因果なのか２月２７日が祝日だった・・・。

次に僕のことなんだけど、名前はサフラって言います。（イヌサフランから）
話が逸れやすい病の発症者。

口数は少なめなんだよ。
よく周りから「元気？」とか「もっとシャキッとしなさい」とか言われてるけど、これは前世からのくせだし、元気だし、なんならただのコミュ障陰キャなだけだし。

口数は少なくても心の声が多い。煩いくらいに

因みにイヌサフランもシキミ同様毒性の植物らしい。

住所はフキヨセシティ（フウロさんのジムのところ）、タワーオブヘブンの近くの一軒家。大きくも小さくも無いおうち。

？　そりゃ、原作で出てきた家が全てじゃないよ？
あれはストーリーに必要なものだけをピックアップしたような感じで、実際はもっと発展しておうちもいっぱいあるからね？

見た目はまだ小さきもの。
なんの因縁か前世の自分に似てる気がする。
解せない。

日本人らしい黒髪黒目。
低身長痩せ型なのはこっち来てから肉、魚を食べた記憶が無いから。
ヴィーガンって訳じゃないけど、これ何の肉って考えると、ね。ヤドンのしっぽは美味しかったよ。

ポケモンの世界転生唯一の弱点かな。

そんなわけで安全（？）そうな木の実ばっかり食べてる。そんな僕を心配して、一応存在していた人工肉たるものを両親が買ってきてくれた。

あ、いや、人のお肉ってわけじゃないよ。
ん、まあ、食べれないことは無かったけど、あんまり美味しくないし（ワガママボーイ）。

あ、本人は至って健康だよ（何故か）

だからヴィーガンじゃないよ。ベジタリアンだよ（必死の言い訳）

服装についても軽く説明しとく。

白のラインが入った黒パーカー、ダボダボ、オーバーサイズ、膝に裾が来てる。

よくフードを被っているから完全に陰キャのそれ。

大きいの買えば長く着れるでしょ、ことでこれ買った。

こんな大きのよく親がＯＫ出したな・・・。

今世のご両親様は身だしなみについては結構自由にさせるつもりらしい。

まあ、奇抜な服とか多かったしね。原作だと。

ワタルさん然り、カリンさん然り・・・。

次はヒトモシちゃん基テラーちゃん。

・・・ あ、タワーオ○テラーからじゃないよ。

この子はおくびょうな性格で甘いものが好きらしい。

みんなと色の違う炎の色と目の色についてサフラに、

「綺麗だよ」

と言われてからは自分の１番の自慢。

性別はメス。ずっとヒトモシちゃんって呼んでたのはそれで。

え、いや、シャンデラ一族ならオスメス判断くらいできるよ？

【個体名サフラに特殊能力が付与されました】

いや、誰だよ。

システム音みたいな天の声やめて？

サフラ

特殊能力：シャンデラ族の雌雄判断能力　Ｌｖ１（↑ＮＥＷ!!）

なにこれ？
なろ〇系やめて？
あと何その特殊能力・・・。

――めっちゃいいじゃん。

人間さんは死の淵から生還すると特殊な力を得ることがあるらしい。

もしかして転生特典もそれなのかな？
で僕の場合アレ？
へぇ～。

――めっちゃいいじゃん。（２回目うぜぇ）

さて気を取り直して次。

両親は両親。以上

・・・　流石に短いか。
えー、でも（基本的に凄く優しくて良い両親だから）特に言う事も無いし・・・。（作者が設定考えてないのもある）

・・・　う、うん。今はこれくらいかな。また何か新キャラとか出たりしたらその時言うよ。

第6話　妹編の始まり

それから常に一緒にいる気がする・・・。

ピカ様みたいにボールから出てるのは当たり前。どこに行こうとしてもチョコチョコ着いてきていて凄く可愛い。

・・・あ、トイレはちょっと勘弁。

寝る時も一緒なのはいいとしても、お風呂も一緒なのは大丈夫？　君、ほのおタイプ入ってるよね？　弱点じゃないの？　このお湯だって言ってしまえばかなり温い「ねっとう」みたいなもんでしょ・・・。

・・・大丈夫？　大丈夫ならいっか。

この子もこの子でお風呂の時間楽しそうにしてる訳で、今もすごくいい顔してお湯に浸かっている。

「ふぅ～・・・」

「モシ～・・・」

お風呂に2人（？）して入ってはそんな声を漏らしている。

因みに桶は嫌がった。

初めは小さめの桶にお湯入れておけばいいかな？　なんて思ってたんだけど、なんかそれは嫌だったらしくバスタブをよじ登ってお風呂に入ろうとした。

「あ、もう。危ないよ？」

落ちる手前で捕まえたけど・・・。え？　桶いや？　バスタブに入りたいの？

「モシ」

頷いた。

・・・うむ。でも流石にそのまま入れたら沈んじゃうからね。

ってことでヒトモシを抱きかかえて膝の上に乗せてあげる。

少し膝を立てれば丁度いいくらいに浸かっていられるようになる。

「モシッ。モシモシ～」

うん。ご満悦のようだ。

蝋燭のような体をしていて、所々溶けちゃってるような体してるけど大丈夫なの？

お湯に溶けた蝋燭入らない？

「とける」はタマゴ技だから大丈夫なのかな？

「モッシ！　モッシ！」

そんな思考を邪魔するかのようにちんまいお手々でお湯をパチャパチャしてるテラーちゃん。可愛い以外の何物でもないね。

うん。溶けててもいいか（狂）。排水溝が詰まるだけだしね（大問題）。

しっかり温まったのでお湯から上がり、髪顔体を洗う。

テラーも洗ってほしそうに見てるけど・・・ どこ洗うんだ？

・・・ とりあえず撫で回しておいたら満足してた。

さて、家族が増えたからって僕は日課を欠かさずに行ってるよ。

折角温まったのにあとは寝るだけじゃないんだよ。

残念、本日の日課夜の部がまだ残っていました～。

という訳で行こうか。

・・・ テラーはまたこの場所に戻ってくる形になったけど大丈夫かな？

「・・・ 大丈夫？」

「モシッ」

大丈夫なようでずっと僕に抱っこされてる。

そのまま塔の中を進んでいく。

まあ、あのヒトモシ達からは逃げるようにしてるけど。

暫くすればどこかに行っちゃうと思うんだけど、それまでの間はコソコソと見つからないように陰キャムーブかましてるよ。

ふふん。こういうのは得意だから任せてよ。

一緒に逃げ隠れしてる時のテラーちゃんが楽しそうなのが何よりだよ。

分かるわ。なんかこう、コソコソしてる時って何か楽しいよね。スリルみたいなの気軽に味わえて。

前回の苛めのせいでここがトラウマみたいになってなくて良かった。

僕は未だに学校がちょっとトラウマで・・・。

やっぱいいや。

――――なあーんて言えるはずもなく誰しもに学校へ行く時がやってくるのです。

それは転生者であり、高校卒業までした僕も例外では無く、僕ももう直ぐ学校に通い始めるみたいなんですよ。

けど、手持ちの同伴ＯＫらしいよ。

良かったね、テラー。これでまた一緒にいる時間が増えるね。

原作だと適当に手持ちに入れててもなつき度上がった気がしたけど、こっちだとどうなんだろ・・・。

・・・ テラーちゃんならなつき度がカンストしそうで草。

そんな訳で今日から学校に通う事になったよ。

いや、決まったのはだいぶ前なんだけどね。

前世では、ん。ま、まあ、あんな感じ・・・ だったわけだし・・・ ね？

あ、あとちょっと忘れかけてたけどトッモも居るかもだし・・・。

いやいやいや、忘れてないって。
３年くらいは焦ってビビって自分のことだけでそれどころではなく、漸く落ち着いた４歳は調べ事におわれ、それも漸く落ち着いた５歳。ヒトモシちゃん事件があった。

これだけ濃い事があったんだから少しくらい忘れかけてても許してね。

という訳だから早速友達探しとトラウマの克服へと入学式へ――

――――いませんでした。

特に特出したことも無くもう既に何ヶ月か経った。
ほぼ全員に日本語で「こんにちは」って話しかけ続けたけど、誰も何も反応無し！

寧ろ、

「えぇ、何このヤベぇやつ～」

みたいな可哀想な奴を見る目を向けてくるんだよ！

や、やばい・・・。このままだと前世の繰り返しじゃないか・・・。転生を全然生かせてないよ・・・。

授業の内容？
はっ！　それこそ前世の記憶チートだわ！

大体ここは前世で言うところの小学校、常識を学ぶようなところだったのだ。

この前のテストだって６２点だったわ・・・。

・・・　いや、前世だったらこの点数で高得点なレベルだったんだよ。僕。

ってそんな事はどうでもいいんだよ。

寧ろのこの事が気になってテストで点取れなかったんだよー。

ホントだよ？

話を戻すけど、いよいよ妹が生まれるんだよ。

そ、あのお母さんのポッコリお腹からね。

そのポッコリの正体はなんとなんと妹でした。

すごく楽しみだよね。

前世でも妹がいたんだけど、ガキの頃の僕は自分の事ばかりしか考えられていなかった。

友達の家に遊びに行く時もチョコチョコ着いてくる妹を鬱陶しく思い正直ちょっと嫌だった。

高校生くらいになれば大人になるものでちゃんと兄として妹と接していたけど、それまでの僕は兄としての行動が足りなかったと少しばかり後悔していた。

だから今度こそはと言ってしまっては2人に失礼だろうけど自分への戒め……　ってレベルでも無いか。

まあ、前世での反省を生かし今世では良き兄となって見せるぞ～。

おー。

はい、元気な女の子ですよ～と、妹ちゃんが産まれました。

おめでとう。

出産シーンは5歳の僕にはショッキングだからなのか、病院に着いた時にはもう既に生まれた時だった。

お母さんもこの子もお疲れ様です。

妹よ、立派ですよ。

病室のベッドで横になってるお母さんの隣にはちっちゃい子がすやすや息を立てて寝てる。

パッパが、

「ほら、お前の妹だぞー」

ってまだ背の小さい僕を抱き上げ見させてくれた。

わーお。

この子が妹ちゃんですか。

生まれた瞬間からわかる。将来は凄いべっぴんさん間違いなしですね。

だって凄く可愛いもん。

ペシペシペシ。
テラーに叩かられた。
・・・どしたん？

因みにこの子の名前はもう決めてあるそうで。
・・・兄の相談も無しに？

まあ、まだ5歳だからね・・・。しょうが無いよね・・・。

で、なんてお名前？

「・・・お父さん、この子なんて名前なの？」

「あぁ、この子はシキミって言うんだ」

へえ、シキミちゃん。いい名前じゃん。

・・・え？「シキミ」？
あ、あのシキミ属の・・・？
こっちじゃないか・・・。こっちは植物だ。

じゃなくて。

え、イッシュ四天王の？

僕の妹四天王になるの？
しゅっげ～。

・・・え、僕ホントに転生者？　なんか役奪われてない？

ま、まあ、偶然かもだしね・・・・・・。

とりあえずシキミちゃんを四天王に育てて見れば分かることかあ（適当）。

てな訳で、こっち来てからのやること1つ目、決まったね。

とりあえずシキミちゃんを四天王にすることから始めようか。

今まで情けない姿ばかり見せてたからね。

お見せてしてあげよう。

――これから始まる僕の異世界チートを。（クソイキリ）

第7話　コレはペンですか？　いいえ、兄の指です

――――――ンなぁ～んてイキってた時が僕にもありました。

前回、
よし、この世界での目標が決まった。
とりあえずシキミちゃんを四天王にすることから始めようか（キリッ）。

と、意気揚々としていたのだが。
冷静に考えたら、

ま、まあ。シキミちゃんも四天王になるほどだから、元からバトルセンスはすごそうだよね・・・。
・・・ 僕が教えることあるかな。
・・・・・・ 逆に教えてもらいそうで心配なってきたな。
てなった。

僕には転生チートがある訳でもない（前前話ラスト参照）し、前世からバトル狂だった訳でもない。

あーあ。やる気が高かった反面、穴を見つけてしまうと一気に落ちますね・・・。

はぁ～・・・。

あ、そんな嫌な気分すらも浄化してしまうほどの愛らしいシキミちゃんの笑みを見てよ。
ベビーベットに寝転ぶ姿も様になってるね。

・・・シキミちゃん。前世ではシャンデラ使いという所から好きになった。

列車に乗ってる人もいた？

・・・僕、ＢＷシリーズは１番好きなシリーズを豪語してる癖に厳選も何もしてないんだよ。

ヒトモシの色違い２体出してノロノロ遊んでただけなんだよ。

話を戻すけどねシャンデラ使いっていう共通点から好きになって、ｐｉ○ｉｖで絵を漁ったり、ポケ○スでシキミちゃん出るまで初回１０連リセマラしまくったり。

・・・色々してなあ（あんましてない）。

憧れすらもしたシキミちゃんが今は妹・・・。兄妹の禁断の恋を描く究極のラブストーリーにはならないと思うけど（フラグ）、僕はこの子の兄になったからね。

今世では僕の思い描く理想の兄になってみせるよ・・・。

うん、あんま自信ないけど・・・。

ま、まあ、今はこのちっこいシキミちゃんだ。

可愛いね。

ほらほら、テラーも見てみ？

「モシ？　モシッ！　モシモシ！」

え、見ない？　そんなことより遊びたい？

い、いやね。僕も遊んであげたいのは山々なんだけど、やわっこいお手々で指を掴んだまま離してくれないんだよ・・・。

そりゃね。相手は赤ちゃんほどの握力だから抜けないってわけじゃないんだよ。
この前も同じ状態になって手を引っこ抜いたら大泣きしちゃってさ・・・。

流石に赤ちゃん、増してや僕の妹だからね。僕でもそんな鬼畜ムーブはしないよ・・・。

てわけでさ、ほら。
テラーはここ、お膝の上おいで？
「・・・ モシ」
うん、いい子。かわいいなあ。撫でてあげようか。
よーしよし、テラーはいい子で可愛いねー。

「～♪」
嬉しそう。

優しく撫でてあげてると気持ち良さそうにウトウトしだした。
眠いのかな？
寝ててもいいよ。
・・・ 僕もまだ動けそうにないし。
ちらりと腕の先を見ればこれまた心地よさそうに眠るシキミちゃん。

よく寝ますね。
通りで。
寝る子は育つと言うからね（セクハラ）。

暖かい部屋に和やかな雰囲気。僕もその雰囲気にのまれていき・・・

――――起きたときには腕と腰、首がしこたま痛かった。

・・・　変な姿勢で寝たからね。

第８話　アニメの特訓回、結構好きだよ

この前のような和やかな空気とは一転。この場には真剣な空気が流れて――――

「おいで～、テラー」

「ラプ？　ラプラ～♡」

――――いなかった。

シキミちゃんを四天王になれるよう育て上げることを心に決めた日から数日。

僕とテラーは家の庭に出て特訓して（遊んで）いた。

四天王になるシキミちゃんの兄として（さりげないタイトル回収えらい）、恥ずかしくないようにある程度特訓しとかないとね・・・。

あと純粋にいろいろ試してみたいからね。

当然ながらこの世界にはターン制限も技の覚えられる数の制限も無い。

ハーメルンに投稿されてる小説だと大体そんな設定だよね。

物の見事にここでもそうだったよ。

試合で使えるのが４つまで。

自由度も高く、例えば「シャドーボール」ならひとつの玉が相手に

向かうだけなんてのも無い。
変れるものなら変えてみろ的な雰囲気バンバン出てた。
あ、そんな変えるつもりは無いよ？
僕（作者）の想像力が足りないからね。
・・・ 僕の脳の容量は３ＭＢだ。
そう思ったので早速いろんな（せいぜい出来て６個くらい。脳が進化したら増やします）技の特訓をしていこう。
さあ、今度こそ僕の転生チートを見せてあげよう――――

――――と言う思考に至って早３年が経ちました。（御察しの通り転生チートは無かった・・・）
唐突すぎ？　同じことを２回もするな？
・・・・。
・・・・・・。
は、早いもんですね。
僕はもう８歳、シキミちゃんに至っては３歳ですよ。喋れるようになってか可愛さが増した気がするよ。
あ、いつをとっても可愛いけどね。
「ラブ！　ラブラー」
なんて考えてると背中に違和感。見てみるとテラーが背中をペシペシ叩いていた。
これだよ。

最近できた新たな悩みの種は・・・。いや、毎日快眠だけどね？

学校にいる時はいいのだ。特に誰と話すってわけでもないしずっと1人だし。

・・・いや、違うよ？　ボッチじゃないよ？

ただね？　アイツら（友達）が見つかった時に僕がほかの友達と一緒にいたらアイツら悲しんじゃうかもでしょ？

・・・ほら、アイツら陰キャだったからさ。

そ、だからそれだけ。決して僕が変な挨拶しまくったから変な奴扱いされてるわけじゃない。（ここ重要）

・・・また話がだいぶそれたね。

学校にいるときは基本的に1人だから大してアクションはない。

問題は家に帰ってきて（手洗いうがい、消毒などをしっかりとしてから）、シキミちゃんにかまってる時だ。

「あ！　にいさんおかえりなさい！」

「うん。ただいま、シキミちゃん」

「にいさんにいさん、あたしとあそんでください！」

・・・？

そう言えば、シキミちゃんってこんな口調だったっけ？

ま、いっか。この世界ではこうなんでしょ（ってことにしてくださ

い、お願いします。作者のリサーチではこれが限界です。ご勘弁を)。

・・・ で、そういう時に限ってテラーがちょっかいを出してくる。

「プラッ！ ラプラッ。プラー」

ペシペシ

なに、どした。かまってちゃんか、かまってちゃんなのか。可愛いなあぁ～。えぇ、なになに。嫉妬しちゃったの？ 大丈夫だよ、も～。そんなちょっとプックリ怒っちゃって～。ほら、頬っぺたプーニプニ・・・ でもないね。進化したからプニプニほっぺちゃんがツルツルのガラスさんみたいになったね。ん？ どっちのテラーちゃんも好きだよ？ 当たり前じゃん。

まあ、それだけならいいんだけど、少し大変なのはちょっとでもシキミちゃんのことを考えでもするとまた怒り出すのだ。

えぇ、どうやって頭の中見てんの～？ みんなできるのかな？

ごめんね、僕にはまだできないみたいだ・・・。

(※普通の人もできません)

ハーレム主人公とかどうやってたくさんの女の子たちを侍らs・・・・・ 相手してるんだろ・・・ ？

ハーレム物ってあんまり好きじゃないから読まなかったんだよね。もっと読むべきだったか・・・。

僕だって転生者とはいえ鈍感系ではないのでテラーからの好意には気付いている。

懐きチェッカーとかで確認したらもうカンストしてるんじゃないってくらいなんだけど・・・。

「きずなへんげ」とかできるようになるのかな？

・・・・・　ま、いっか。僕も同じくらい好きだからね。

――――――っていう近況報告でした～。（中身なさすぎィ！）

幕間　―第1回墓守家オトメの戦い―

それはいつも通りテラーと風呂に入ろうとしてる時に起きた。

「それじゃ、お風呂貰うね」

「モシ、モッシモシ」

お着替え持ってお風呂場へさあ行こう。

「やっぱりテラーさんばかりズルいです！　あたしもにいさんとおふろ、はいりたいです」

リビングからお風呂場に繋がる扉を通せんぼして、シキミちゃんが言い張った。

「あら、兄妹仲良いわね。それじゃあサフラ、シキミの事頼んだわよ」

「え？　あ、うん」

なんかシキミちゃんも僕と一緒にいたがってるみたい・・・・。

いや、普通にお風呂入るだけだから僕は別にいいけど・・・・。

「モシッ！　モシモシ！」

でもなんか、テラーが嫌がってるっぽい？

「・・・ん、じゃ。シキミちゃん、準備しといで？」

「はい！」

そう言うと嬉しそうに着替えを取りに行くシキミちゃん。

「モシ!?　モッシモシモシ！」

テラーさんは「嘘でしょ!?　信じられない！」みたいに騒いでる・・・。

え、いや別にいいでしょ。

ただお風呂一緒に入るだけだよ？

「モ～シィ～・・・　！」

・・・　なんでそんな悔しそうなの？

まだ納得してない様子のテラーと準備をすっかり終えて来たシキミちゃんを連れてお風呂に入る。

湯船に浸かったところでまたシキミちゃんが抗議してきた。

「なんでテラーさんだけにいさんのおひざのうえなんですか!?」

ええ～・・・。これもダメぇ～・・・。

「モッシ」

君もそんなにドヤ顔で煽らないでよ。

いや、テラーちゃんはお膝に置かないと溺れちゃうんだよ・・・。

「じゃああたしもおぼれます！」

そう言ってお風呂に潜るシキミちゃん。

いや、溺れるって・・・。今潜る前に普通に息いっぱい吸ってたよね？

なんて思ってると5秒くらいで顔を出す肺活量よわよわシキミちゃん。

しょうがない・・・。

シキミちゃんを抱き上げてお膝の上に乗せてあげる。

「モッシ！　モシモシ！」

反対のお膝に乗ってるテラーが抗議の声をあげる。

・・・ご、ごめんね。こんくらい許してあげて？

渋々と言った感じで了承してくれたみたい・・・。

これでようやく落ち着いたかなって思ったけど、

「にいさん！　あたしのこともあらってください！」

「モシ！　モシモシ～！」

・・・。

「にいさんにいさん！　たおるでふいてください！」

「モ～シ！　モ～シモシ・・・」

……。

「にいさんにいさんにいさん！　こんどはぱじゃまを、きせてくだい！」

「……　モッ…　シ」

……。

なんやかんやあったお風呂騒動。僕が全ての任務を遂行したことで落ち着きを取り戻し、日課もこなしたので、さあ寝ようと言う時だった。

「やっぱりテラーさんばかりズルいです！　あたしもにいさんといっしょに、ねたいんです」

それ、大声で言わないで？

ねえねえ、シキミちゃん。もう1人で寝れるようになったんじゃないの？

この前はもう1人で寝れます！　なんて言って僕に褒められたがってたじゃん…。

どしたんだろ…。そう言うタイプのイヤイヤ期なの？

シキミちゃんもう1人で寝れるでしょ？

「ズルいです！　テラーさんばっかりいっしょにねて。じゃあ、テラーさんおひとりでねてくださいね!?」

理不尽…。

テラーを虐めないであげてよ…。

なんだかワガママさんだね。今日のシキミちゃんは。

しょうがない…。

僕ももう眠いから、

「じゃあ、今日は一緒に寝ようか」

「…！　はい！　きょうからまいにちいっしょにねます！」

…言ってねぇよ。毎日とは言ってねぇよ。

「…モッシ」

なんかもうテラーちゃんも諦めちゃったみたい…。

申し訳ないっす…。

「では、さっそく。にいさんのおとなり、しつれいします…」

「モッシ」

「あ、ごめんなさい。テラーさんがこっちがわなのですね。…じゃあ、あたしがこっちがわに…」

「モッシ」

「…」

…。

シキミちゃんが僕の隣に行こうとする度にテラーちゃんが僕の隣には行かせんとガードしてる・・・。

・・・。

・・・・・・。

・・・・・・・・。

もう眠いから寝ようよ～・・・。

結局、テラーが折れて僕がテラーとシキミの間に挟まれて寝ることになった。

まあ、1日くらいこんな日があってもいいかな？

なんて考えを裏切るように毎日続いた。

でしょうね。

そんな日常の一コマ。物語の幕間。

幕間　―進化の奇跡（アイテムじゃないよ）

――――――諸行無常。

当たり前だと思っていた事は当たり前なんかじゃなく、壊れないものも無く、日常がずっと続くなんてことは無い。

ずっと、永遠に、なんて都合のいいものはなくいつかは終わりを迎える。

・・・　何が言いたいかって？

「プ、プラー・・・。ラプ、ラプラー」

テラーはランプラーに進化した！

それはいつも通り、この世のものとは思えないほどの（甘い）修行（て言う体で遊び）をしている時だった。

よし、テラーちゃん。今のは良い「シャドーボール」だったよ。

もう1回行ってみようか。

「モッ、モッシ・・・」

・・・　あれ？　どしたの？

なんかテラーが光ってる・・・？

そしてなんか頭の中によく聞いたことのあるような音楽が・・・。

――――おや？　テラーの様子が

・・・まあ、止める理由も無いし、Ｂボタンもない。

テラーが強くなりたいと願うのであればトレーナーである僕は全力で応えよう。

という訳で、

――――光が晴れる

中から出てきたのは勿論、

おめでとう。

よろしくね。

「ラプラー！」

水色のお目目と薄紫色の炎、ランプラーのテラーちゃん――――

・・・おめでとうの意味も込めてテラーにハグしようとして気付いた。

「ラ、プ・・・。ラプラー」

まだ新しい体に慣れていないのか・・・。

不安定飛行（？）してるよ。

フラフラ飛んでるテラーちゃんも可愛いね。

今までテラーちゃんはヒトモシで、地面を歩いて（？）いたのに急にそれが出来なくなった。
頑張ってバランスをとってるみたいだけどまだグラグラってるね・・・。

「にいさーん、テラーさーん。ごはんのじかんだそうで・・・　あ！　テラーさんしんかしたんですか!?」

シキミちゃんが呼びに着た。進化したてのテラーちゃんを見つけて驚いてる。

「うわあ！　すごいです！　ランプラーですー！」

「うん、でもまだ飛んだばかりだから安定しないみたいで・・・」

「・・・　そうなんですね。あ！　しんかもすごいですけど、ごはんです、ごはん。いきましょ！　にいさん」

シキミちゃんが僕の腕を掴んで引っ張る。
ああ、別にそんな引っ張らんでも・・・。

「プラー！」

テラーちゃんがそんなくっつくなーって飛んできた。
いやね、僕からくっついてるわけじゃないからね・・・。

ってか、

「テラーちゃん普通に飛べてるじゃん・・・」

原作の連れ歩き機能を彷彿とさせる腕（？）のパタパタによりバランスをとりながら移動することに成功していた。

さっきの演技かよ。名女優だな。

そりゃそうか、野生で生き抜くのにわざわざ不利な体勢になったりしないか・・・。本能的にできるんだろうなあ。

「ラプ!?　・・・ラップ、プラー」

いや、まだ出来ないからもっと構ってじゃないよ。さっき思いっ切り出来てたじゃん。

まあ、抱っこは何時でもしてあげるけどさ・・・。

はい、ギュッと。

「ラプラ～♡」

今はまだ僕が抱き抱える方だけど、シャンデラさんになったらどうなるんだろ・・・。

捕まったら飛べるのかな？　ちょっと憧れてたんだよね。「サイコキネシス」でカバーしたら出来ないかな？

そもそも進化したいと思うのだろうか・・・。

いつそんな考えになってもいいようにやみのいし探しとかないと・・・。

そんな日常の一コマ。物語の幕間。

幕間　―学校での邂逅―

みつけたわ。いや、絶対こいつだって。

今日うちのクラスに転校生、マスデっていう子が来たんだけど、こいつがめっちゃ陰キャなの。

それだからなんとなく話しかけてみたら（友達が欲しかったからじゃあないよ。断じて違うからね。）話が合うのなんの。

向こうも友達が欲しかったみたいだったからね仕方無く（ここ重要）友達になった。

ふと思ったんだよね。

あれ？　コイツあの時のアイツ（助手席のやつ）なんじゃね？

って、

そんな訳だから試してみようと思いさっきから日本語で話しかけてるけど分からないふりしてる。

でもきっとロールプレイなのだろう。

なるほど完全にこっちの住人になろってのか・・・。

よし、その設定乗ってやろう。

・・・　自分とかあいつらの名前はなぜか思いだせないな。

何でだろ？

「サフラ君、次の授業移動教室だから行こ？」

「あ、うん。行く」

因みに次の授業は複合タイプについてのタイプ相性らしい。

・・・ッハ！

これも前世の記憶のおかげで余裕だな――――

――――マスデの協力があれば。

いやいやいや、言い訳させてくれ。

流石に1トレーナー、（自称）色勢と言えどストーリーはちゃんとやったし、対戦動画なんかもよく見てた。

だからなんとなくの子たちのタイプ相性はわかってるんだけど、

そこは僕ですよ。

肝心なところが抜けてたりする。

たまにあるじゃん、ほら相手のタイプをド・忘れすること。

え、無いの？

・・・すごいねみんな。

まあ、そんなときのナイスフォローをしてくれるのがこのマスデ君なのさ。

転生者じゃないのにタイプ相性を完全に理解してるなんてことは無いだろう・・・。

その上、僕が何も言わなくても良きタイミングでフォローを入れてくれる。

これはもう前世からの連携がなせる業でしかないだろう。

そうじゃなかったらマスデ君ただのすげー奴だからね。

「ねぇ、ほんとに前世の事とか覚えてない？」

流石にずっと忘れたふりは寂しいからね。たまにこうやって聞くんだけど、

「いやいや、そういうのには憧れるけど今世の記憶しか持ってないよ。やっぱり面白い発想するね、サフラ君は。そういう題材の漫画っでも投稿してみようか・・・。色々面白そうな設定教えてよ」

「あ、うん。いいけど・・・」

む、今日もロールプレイングなのか。しかもちゃんとオタク陰キャだ。

ほら見た？

この年で自分の漫画を描くなんて転生者じゃなかったらただのすげーオタクだよ。

・・・まあ、いつかもう一人も見つかればその時には自然と辞める

か。

え、ちゃんとやめるよね。

マスデ君ただの一般人オチとかいらないからね？

そんな訳で念願の・・・じゃ無くて、学校での初めての友達かつ、前世でのお友達とも奇跡的に出会えましたあ。

良かった。実はコッチに来てないんじゃないかってちょっと不安だったんだよね・・・。

――後に判明するけど結果的に言えば全然違う子だった。

幕間　―▽シキミちゃんの欲しがる攻撃！―

「とーさん！　アタシもポケモンさんがほしいです！」

台バン！

机を叩いて講義するシキミちゃん。

・・・　叩くのはちょっと行儀悪いよ？

「し、シキミにはまだ早いんじゃないか？」

あ、この流れはやばい。無理な流れだ。

それは困るな、シキミちゃんには四天王になってもらうんだ。

そのためには早めにポケモンに触れてて貰わないと。

「父さん、僕もそのくらいにはもう持ってたんだし、僕がいる時はいいけど学校にいる時は遊び相手がいなくて寂しいんだと思うよ・・・」

「な、なるほどな。因みに最初は誰がいいんだ？」

お、いい感じかも？

「はい！　アタシもヒトモシさんがいいです！」

兄の真似をしたがるシキミちゃん可愛いね。

ペシペシペシ・・・。

――――わかったって。

テラーを撫でながら追撃する。

「ほら、ヒトモシなら（家の家系的に）安全でしょ？」

「・・・ わかったよ、今モンスターボール持ってくるから待ってな」

渋々と言った感じではあったけど了承してくれたみたい。良かった。

「じゃ、お昼の鐘付きの時に捕まえに行こうか」

「はい！ おねがいしますね、にいさん！」

お父さんは置いていった。ごめんね。

準備してさっそく塔に入ってみる。

シキミちゃんは久しぶりだからなのか怖いのか手を繋いできた。

で、当然のように反対の手をテラーが繋いできた。

・・・。

別にいいけどね、ちょーっと2人ともギュッとし過ぎて痛いかな～？

まあいいや、歩いて2階に着いた。

毎日通ってるからわかるけどあの時の子たちはもういなくなってしまった。

別にもう攻撃してこないからいいけど・・・。

ヒトモシはここで生まれてるみたいだけど強くなってランプラーになったりするとどこかへ行ってしまう。
まだ謎が多いからね。ポケモンの事も全然分からないみたい。

そんなこと思ってると1匹のヒトモシが近づいてきた。

あ、この子最近来るとよく見る子だ。

いつもなにか言おうとするんだけどやっぱり怖いのかどっかにすぐ行っちゃうんだよね。

顔見知りだからやりやすくはありそう。
という事でまずはこの子からシキミちゃんの手持ちになってくれないか聞いてみようか。

「モッシ…。？　…！　モッシ！　モシモシ！」

え、どしたの？

話を聞こうと思ったら着いてきてって言われてどこかへ案内された。

あ、どっかお話し合いルームでもあんの？

改めて説明しておくけど、塔の中、各フロア1部屋だけではないからね。
中央の部屋から東西南北と4つの部屋に分かれていて、そのうちの1つに案内された。

おお、ここは懐かしい。

テラーと会ったところだ。

この部屋に入ってみると、一斉にヒトモシからの視線が刺さった。

・・・ え。な、なに？

僕なんかしたっけ？

視線に耐えながらも話を聞いてみた。

「モッシ、モシモシ。モーシモシモシ。モッシ！　モシモシ、モッシ！」

その間も視線が凄かったけど・・・。

「・・・ モッシ、モシッモシモシ。モシ、モシモシ。モッシモシ！」

何でも聞くところによると（!?）あの時テラーをかばったことを見た子がいたらしい。

それで虐められているのであれば異端者であろうと助けるすごい人としてなんか、僕が有名になっちゃったんだと。

一部では信者もできていたという。

・・・。

異端者と関わったということで全員からの印象が良いわけではないけど、それでも良い印象が持ってるヒトモシがいるだけでもいいでしょ。

それだけテラーちゃんの味方してくれる子がいるってことでしょ？

あの時から妙にヒトモシたちに懐かれてるなと思ったらそれでなのか・・・。

へ、へぇ～。

こんなことならあの子からもっと早く話を聞けばよかったな・・・。

い、いいいいや、べべべ別に怖がってたわけじゃないけどね!?

その信者の中でもこの子は特に熱狂的らしく宗教と名ばかりのファンクラブ設立したり、布教活動としてほかのフロアに出向いて僕の武勇伝を語って回ったという・・・。

いや、なにしてくれてん・・・？

ヒトモシ達何もすることないからこういうのに飢えてるのかな？

その信者たちの総本山、活動拠点が聖地でもあるココなのだという。

え？

そもそも僕たちの家系は塔をきれいにしてくれたり悪い奴らを追い払ってくれるからすでによく思われていたらしい。

すごいな家の家系は。

ここに生まれてホントによかったよ。

説明を受けていると2人が静かなのが気になった。

「モッシ、モシ。モッシモシ？」

1人（？）のヒトモシに話しかけられてるけど・・・

「え？　・・・　え～っと？」

やっぱりシキミちゃんはわかってない様子。

「ラプ!?　ラプ、ラプラー！」

テラーちゃんはなんかすごい喜んでるし・・・。

え、いやなんで2人とも宗教勧誘受けてるの？
てか、テラーちゃん普通に入るって言わないでよ・・・。

「に、にいさ～ん・・・。あのすみません、ヒトモシさんたちなんていってるんでしょうか？」

いや、なんで僕ならわかると思ったのかな？

・・・　わかるけどね？

内容だけにあんまり自分で言いたくないんだけどなあ。

「えっとね、君達も一緒にこの活動に参加しない？　今だったら教祖様のありがたいお話を聞けるよってなんだこれ」

自分で言ってて驚いたよ。
誰だよ教祖様って・・・。

「モッシモシ、モシモシ！」

勿論ワタクシです、って・・・。
ああ！　もう！　モシモシゲシュタルト崩壊してきたよ！（作者

が）

てことなんで次から僕が同時翻訳したげるよ。（!?）

「申し遅れました。ワタクシ、英雄様教の教祖をさせて頂いています。ヒトモシと申します」

いや、ヒトモシなのは知ってるけど・・・。

なに？　英雄様教って？

「はい、約3年前ちょうどこの辺りで起きた事件が開教の切っ掛けでございます」

3年前？　・・・　あ、それって。

「ええ、英雄様お察しの通り貴方様がここで『異端者』だったヒトモシを助けた事です」

やっぱりそれかい。

そんで、英雄様って・・・

「ええ、勿論貴方様ですよ」

・・・。

「種族の壁、自らへの攻撃を顧みず『異端者』を救ったとしてその時よりこの場では語り継がれておるのです」

・・・・・・。

「そして我らの言葉さえも理解されてしまう英雄様、大変無礼ながら

貴方様のお名前をお伺いしても？」

……。

あ、

な、名前？

「えっと、僕はサフラ。こっちのランプラーはテラー。この子は妹のシキミだよ。よろしくね。…　あ、あと出来れば『異端者』てのはやめて欲しいんだけど…」

「サフラ様、テラー様、そして妹様のシキミ様でございますね。はい、ありがとうございます。此方こそよろしくお願い致します。重ねて『異端者』の件も了解致しました」

良かった。テラーはなんとも思ってないみたいだけど、なんか仲間ハズレは可哀想だからね。

「では、今日から英雄様教改めてサフラ様教とさせて頂いています」

え、いやちょっと待って!?

瞬間、

「「お還りなさいませ、サフラ様、ようこそお越しくださいました!!!」」

めっちゃいっぱいいるヒトモシが声揃えて言った。

その「還る」怖いからやめてよ…。

やっべー。なんかこれから始まりそうだけど、文章力のない僕じゃ

伝え切れるかなー？

…て、あれなんでこうなったんだ？
あっさり捕まえるだけの予定だったのに…。

そんな日常の一コマ。物語の幕間。

幕間　―これだから異世界の宗教は怖いんだよう―

・・・。

・・・・・・。

・・・・・・・・・。

っは!?

あ、危ない危ない。よくわかんないことが起きすぎて脳が機能を停止するとこだった。

これも幕間になるはずだ。幕間てのは短いんだ。だからもうちょっと頑張ってくれ、僕の脳（残念、何故か幕間なのにＰａｒｔ２に入ったよ）。

ありのまま起きたことを話すのも面倒だから前回の話見ろ！

なんか宴かなんかの準備を始めようとしてるみたいだけど、止めなきゃ。

だって僕達の目的だってまだ達成出来てないし、

何よりここ、

――――お墓だよ？

タワーオブヘブンの２階。

いや、君達からしたら普通かもなんだけど、（自称）真っ当な人間からしたら、やっぱ、お仕事慣れしてるとは言え・・・ちょっと、ねえ？

とりあえず、ここに来た目的だけでも聞いてもらおうか・・・。

「あの、・・・ 教祖ヒトモシ（？）さん、ちょっといいですか？」

「さ、ささささサフラ様からお話掛けて頂けるとは・・・！ な、なんでございましょうか!? ワタクシに出来ることであれば何なりと！ ・・・あ、あと敬語は不要でございますよ？」

腰低すぎん？

「そ、そう？ じゃあ、僕ここに来たのは妹のシキミちゃんの手持ちになってくれるヒトモシを探しに来たんだけど――――」

瞬間、

「「「では、ワタクシが!!!」」」

めっちゃみんなてあげた。（機能停止）

「ということで始まりますのは、サフラ様の妹様で在られるシキミ様の手持ち枠争奪戦！」

いつの間にか集まっていたギャラリーが湧く。

いや、何だこれ・・・。

「ルールは簡単！ 参加者全員がトーナメント形式で・・・」

そのまま説明が始まった。

なんか特等席ですって用意されたとこに座ってるけど、ホント、なんなんすかねコレ。

隣のテラーちゃんもなんだか眠そうだし・・・。

渦中のシキミちゃんも・・・ って、あれ？　シキミちゃん？　どこ行った？

って思ったら割とすぐ近くで誰かと話してるっぽい？　まあ、近くにいてくれるならいいか・・・。

説明が終わりいよいよ第1回戦、気になる布陣ヒトモシ対ヒトモシ。

・・・ そりゃそうでしょ。

とくに語るとは無いものの熱いバトルが繰り広げられて行き、遂に決勝戦。

「今大会も遂に決勝！　ここまで上り詰めてきたのは～・・・」

カット！

いや～流石は決勝戦、めちゃくちゃ盛り上がったな。

「ということで優勝は・・・ ！」

と、ジャッジが言いかけたところで、

「にいさんにいさん、あたしこのこにきめました！」

「お初目にかかります！　兄上様！　今日この日よりシキミの相方として精進していきたいと思っています！　よろしくお願いします！」
（↑ヒトモシ）

トーナメントと全然関係無いとこから来たヒトモシを連れたシキミちゃんがいた。

シキミちゃん、ヒトモシの言葉分かんないもんね。暇だったよね。トーナメントやってるって知ってた？

「「「……」」」

あーあ。大会関係と優勝者可哀想に…。

「では、お2人ともご入信されると言うことでよろしいですか？」

よろしくねぇーですよぅ。

テラーちゃんもシキミちゃんも勝手に入ろうとしないで？

シキミちゃん、言葉分かんないのにうんうん頷いたらダメだよ？

なんで2人とも入る気満々だったんだよ…　いや、やめてよ。ホントに入んないでね？

おい、シキミちゃんのヒトモシちゃんさん！

「兄上様、お呼びで？」

シキミちゃん達が勝手に入信しないよう、見張っといて。

・・・お願いします。

「御意に」

えー、何この子。めっちゃ頼りになるんだけど～・・・ったいたいたいたい！　痛い、痛いって！　やめ、ちょっと！　や、やめて!?　て、テラーちゃん、テラー！　やめっ！　ご、こめん！　ごめんて！　もう言わないから許して!?

・・・まあでも、テラーがここでは厄介者として扱われ無くなってくれてよかったよ。

願わくば他の色違いとかが生まれたとしても前みたいに異端扱いしないことを願うよ。

・・・まあ、ここでは大丈夫そうかな？

むしろなんか信者の間ではテラーは理想のヒロイン像として憧れがあるらしい・・・。

・・・。

あ、そうですか。

テラーちゃんには言わないようにしよ。

シキミちゃんの目的も達成出来たんだし鐘ついて帰るよという事になった。

勿論めっちゃ引き止められた。いや、帰して？

あ、そうだ。帰る前に1つ。

「ねえ、教祖ヒトモシさん。余裕があったらでいいんだけど、もしまたテラーちゃんみたいな『周りと少し違う子』が生まれたりしたらここで保護して欲しいんだ。ここなら多分周りの皆と同じ待遇で過ごせるでしょ？」

勿論、僕も毎日3回くらい来て見廻るけどさ？

そう言うと教祖ヒトモシさんは笑顔で、

「サフラ様の頼みとあらば・・・ と、言いたいとこですけど。元より、そのつもりでございます。ですが、サフラ様のお願いですので更に見廻りは此方でも強化させます故、御安心下さい」

とても嬉しそうに言った。

最後という事なので皆で屋上まで行って、鐘ついてバイバイとなった。

・・・ うむ、中々に濃ゆい日だったけど、なんかスッキリした感。

テラーちゃんもシキミちゃんも元気に・・・

・・・ 寝てる。

いや、あのね、シキミちゃんは兎も角、テラーさん？ 貴方はボールに戻って欲しいんですけど？

この子、実は学校の時もこっそり出てるんだよね。ボールの中の感覚なんてあの時以来覚えてないんじゃない？（第４話参照）

「兄上様、大丈夫でございますか・・・？」

なーんで、あんたまで出てきてるんでしょうねえ？

そして当然のように僕に乗るなし・・・。

まあ、いいけどさ。（シキミちゃん約１５ｋｇ、ヒトモシ３．１ｋｇ、テラーちゃん１３ｋｇ、合計３１．１ｋｇ）

「ヒトモシさん、コレからシキミちゃんの事よろしくね？　君はシキミの１番の相棒なんだから・・・」

「ええ、勿論です。それと兄上様も、私の主の兄であるだけのはずなのにコレから何度もお世話になる気が致します。ですので、兄上様もコレからよろしくお願い致します」

・・・。

この子やっぱり凄そうだ。シキミちゃんと肩を並べる相棒には調度良いのかもな。

「勿論、コレからよろしくね」

と、言うとニコッと笑うヒトモシさん。

あら、可愛いったいたいたいたい!?

「痛い、痛いって！　ね、ちょっ！　２人ともホントに寝てんだよね!?　や、やめっ！　痛い痛い！　くっび！　首はダメだよシキミちゃん！　締まってる！　締まってるから!?」

次の日からの日課がちょっと大変になったのは言うまでもない。

そんな日常の一コマ。物語の幕間。

幕間　―技は1日にしてならず―

シキミちゃんがヒトモシさんを捕まえてから僕達の特訓の手伝いをしてくれるようになった。

「アタシ、兄さんのお手伝いします！」

「モシモシ」

実戦経験は1人でやるよりも効率がいいことがわかったのでこの申し出は非常に助かる。

「おお、それは助かるよ」

僕が今してるこの特訓が自分に返ってくるとも知らずに健気に手伝ってくれると言う我が完璧妹。

さすしき

「よしよし」

「えへへ～」

「～♪」

シキミちゃんとヒトモシさんの頭を撫でてると別の部屋に行ってたテラーちゃんが壁から出てきた。

「プラー！　ラプラー」

いや、壁すり抜けたらダメでしょ。・・・　もう、かわいいなあ。

この前のトイレの壁もすり抜けてきた時は流石にびっくりしたけど・・・。

あ、そういえばこの子すりぬけでしたよ。

特性。

え、性格と言いありえないだろって？

・・・　そんなもんでしょ。（ご都合主義タグ追加済み）

さてと、技の練習に戻ろうか。

僕は基本的に「シャドーボール」の練習は朝、昼とかの太陽の光がガンガン出てる時に行う。

「シャドーボール」とは名の通り影とか暗い所、夜などに使うと技の威力が上がる。

でも僕は環境なんかに頼らず素の状態で最高の火力が出るように燦々照り付ける太陽の元で（実際に日光に当たってるのはテラーだけで僕は直射日光がダメすぎるから日陰で）特訓している。

テラーちゃんの最終進化、シャンデラと言えばやはりその高い特殊攻撃種族値だろう。

Ｃ１４５とか伝説、幻クラス何じゃないか・・・　って、思うんだけどＣ１４５一般ポケモン増えてね？

クワガノン然り、サニゴーン然り。

はんっ。君らみたいな鈍足Ｃ１４５なんてシャンデラさんの「かえんほうしゃ」と「シャドーボール」で1発ですわ。（アイテム無しに限り）

向こうじゃランクマとか怖かったけどこっちじゃあ（多分）怖いもの無しっしょ…。

見てろよ、御二方？　見つけ次第速攻技仕掛けて（違反）真の一般ポケＣ１４５とは誰か思い知らせてやっからな。（実際にやるとは言ってない）

…　なんの話だっけ？

ああ、そうだ。技の練習しなきゃじゃん。折角、シキミちゃんが手伝ってくれるからね。

と、その前に技の説明を…。

で、逆に「かえんほうしゃ」の練習は曇り、雨の日に行う様にしてる。これもまた同じで太陽光が出ているとどういう訳か威力が上がってる気がするの。

それで「シャドーボール」と同じ理由で「かえんほうしゃ」も天気有理を取らずとも高威力で打てるように練習してる。

メインウェポン3つ目は「サイコキネシス」。

練習時は「サイコキネシス」の常時発動を目指しているけど、やっぱりタイプが違うからなのか上記2つのように順調というわけでもなさそう…。

まあ、出来るようになれば1番強そうだけどね。弱いわけがないのだ！

４つ目は「エナジーボール」。
なんかエナボの疎外感・・・。
いや、だってエナボって岩地水の弱点用だしね・・・。
いや、いっそソラビも練習しとくか？
前世では命中安定、デメリットなし、溜め反動なしの技しか使わなかった。
いや、なんとなくの性格的に使えなかった。
ま、ここじゃそうはなんないけどね？
練習すればするほど技の威力が上がっていくという前世じゃありえない仕様（？）になってるからね。
実戦で1番使いそうな技たちの説明も終わった事だし早速やっていこうか。
まずは、「シャドーボール」から。
「テラー、小さく小さくだ」
どこぞの炭兄貴よろしくそんなことを言ってみる。
あ。いや、小さくって技の「ちいさくなる」の方じゃなくてね？
あー。ん。・・・ ま、いいや。そっちの練習もしちゃお。
さて、技の練習は完成した時のお楽しみが無くなってしまうのでこ

こらで新たに判明したこっちの仕様(?)について説明していこうか。

この世界に個体値なんてものは存在しないっぽい。

いや、流石に初めは誰しも得意不得意がある。

でも原作でもそうだったようにそれ相応の特訓をすれば基本的に能力が上がり、所謂「きたえた!」状態になる。

努力が報われる都合のいいセカイみたいでいいですね。

…。散々調べてもこの位しか分からなかった。

やっぱりまだ足りないな…。

知識がまだ必要だけど頼りになりそうな友達はロールプレイングで前世の記憶ないフリしてるし…。

もう1人にかけるしかないな…。

本格的に探すのはまだ先だけど、早いとこ目処でも立てとかないとな。

「兄さん? どうかしたんですか?」

「ラプ? ラプラ」

「モシモシ?」

おっと、考え込みすぎたか。

「あ、ううん。何でもないよ」

「そうですか？　それじゃあ、もっと特訓しましょ！」

そんなことを考えながらもこの世界を満喫して行く。

そんな日常の一コマ。物語の幕間。

幕間　―（シ）キミと夏の終わり将来の夢―

僕はよく本を読む。

それはシキミちゃんに真似させたいとか、この世界について詳しく知りたいとかあったけど、最近では普通に面白いから読むようになってきた。

ま、何気前世でも読んでたしね、

ラノベだけど。

そんな今もちょっと面白い本があったから読んでいると、

「兄さんはよく本を読んでいますね。本がお好きなのですか？」

トコトコ歩いてきたシキミちゃんが話しかけて来た。

「（シキミちゃんの四天王部屋にいっぱいあったからシキミちゃんにも読んで欲しいって思ってなんだけど）うん。まあ好きかな」

「じゃっ、じゃあ！　アタシがもし本を書いたら兄さんは読んでくれますか？」

シキミちゃんは本を書いてるって設定が原作であったけど、遺伝子レベルでそう記憶されてるのか・・・。

「もちろん、シキミが書いた読むの楽しみだよ」

「！　…　はい！　アタシが本を書きあげたら1番に兄さんに読んで貰いますね！」

よし、楽しく話せたな（P感）

「じゃあ、そのためにもいっぱい勉強しなきゃね」

四天王試験にも大分筆記試験があるみたいだし

「はい！　頑張りますね！　…　あ！　では兄さんが勉強を教えて下さい！」

…。

「え、あ～。えっとね…？　それは～ちょーっと」

僕がそんな風に狼狽えていると、

「サフラ、また本ばっかり読んで…。ほら、これあげるからシキミと外で遊んでらっしゃい？」

お母さんから助け舟と花火を貰った。

この世界にも花火ってあるんだね。

あ、ココの映画でできたか…。

ココの映画泣きそうになったよ。

死ぬ前に見れてよかった。

外に出て袋から取り出し、テラーちゃんに火をつけてもらう。

あ、ひのこでいいよ。ひのこで。

あっぶぇ。こんな時に放射なんて撃たないでよ・・・。

落ち着いて花火を眺める。

うわー、きれー。とはなったけど、やっぱり手持ち無沙汰だったので、

「そう言えばシキミちゃんは将来何になりたい？」

何となく聞いてみた。

最終的に四天王にはなるんだろうけど、今現在はどう思ってるんだろ・・・。

この歳だからケーキ屋さんかお花屋さんかな？（偏見）

「はい！　アタシは兄さんのお嫁さ・・・・・　はっ！　し、四天王！　四天王になりたいんです！」

あ、やっぱり遺伝子レベルでその考えが出るようになってるのか・・・。

・・・　え、今なんて言いかけた？

因みに僕は鈍感系でも難聴系でもないよ？

まあ、聞かなかったことにしてあげようか。

まだ小さい子だからね。よくわかって無いこともあるだろう。

それにこの世界でも近親婚は無理でしょ？

え、無理だよね？　大丈夫だよね？

「この前テレビで見た四天王の人達がカッコよくて・・・！　それでアタシも四天王になりたいって思ったんです！」

ああ。そう言えばこの前、今の四天王を調べるためにテレビで見てたらシキミちゃんがやけにキラキラした目で見たな。

それでか。

なるほど納得。それなら俄然やる気が出るという物だ。

「じゃあ、僕がシキミちゃんを四天王にしてみせるよ」

「本当ですか!?」

この世界で僕がどこ程度通用するのか分からないけど、そもそもシキミちゃん1人でもやれそうだしね。

「うん。シキミちゃんの物語はシキミちゃんだけのものだからね。是非とも素敵な物語を紡いで欲しいんだ」

原作シキミちゃんに許された数少ないセリフの中の名言をここぞとばかりに言い放ち刷り込みさせておく。

・・・てか、この言葉は普通に好きだな。

「・・・！」

ほーら見ろ。めっちゃ感銘受けた～みたいな顔してるぞ。

後は今の言葉を覚えて挑戦者たちにバシバシ言ってもらう様になればシキミちゃんの完成に近づくね。

・・・シキミちゃんの完成ってちょっとマッドサイエンティストみたいだね。

くだらない事を思いながらも残りの花火を楽しむ。

そんな日常の一コマ。物語の幕間。

ＰＳ．コラッタ花火で火傷した。

幕間　―いやいや、そんな早く出来るわけ　・・・　え、もう完成した？―

「流石兄さんです、また負けてしまいました」

「まあ、ね。でもシキミちゃんも強くなったね」

あっぶね～～！

負けるかと思ったわ！

でも何とかギリギリ兄の威厳は保てたぞ・・・。

え？　あ、そうですよ。考えてた技は完成したんです。

完成形態を簡単に紹介しますね。

「シャドーボール」

大砲のように大きくて１つ１つの威力が高い一撃　ｏｒ　ＳＭＧのような小さなシャドボの連射。前者と比べると発動時間は圧倒的に早いけど威力は向こう。

どちらにしても夜、洞窟等暗い場所で使うと威力が上がる。

～以下回想～

「よし、じゃあ、そこのミネズミに実験台になってもらうか」

「ミネ!?（な、なんやて!?）」

「それじゃあ。テラー、おっきい『シャドーボール』」

「ラプー・・・！」

「ミ、ミネ…!?（お、おい、うそやろ…!?）」
「もっと！　もっと大きく」
「ラプー…！」
「ミ！　ミネズミ！（せ、せや！　今のうちに逃げたろ！）」
　ミネズミは逃げ出した！
「おっと、逃がさないよ？（畜生）」
　――逃げられなかった！
「ラープー…！」
「ミ、ミネズミ…（あ、もうアカン。もう好きにせぇ…）」
「やれ、テラー」
「ラ…プー！」
「…？　ミ、ミネ？（な、なんや？　まさか見逃してくれたんか？）」
「うん、いい感じだね（畜生）」
「ラプー」
「ミネ、ミネミネ。ミネズミ（な、なんやお前、そんな悪いやつじゃなかったんやな。良かったわ。ほな、あっしはもう帰りますわ）」
　ミネズミは逃げ出した！
「それじゃ、もう1回やろっか？（畜生）」
　――逃げられなかった！
「かえんほうしゃ」
　バーナーとか溶接みたいな超一点集中の青い炎。まるでシン・ゴ○ラ。

　～以下回想～
「テラー、細く強く『かえんほうしゃ』」
「ラープー！」
「ほら、この様に炎の色が赤から青に…　え、ほんとに出来てる…」
　凄いなこの子。
「さ、シキミちゃんもやってみて？（鬼教官）」
「はい！　ヒトモシさん！　テラーさんみたいに『かえんほうしゃ』で

す！」
「モシー！」
　いや、お前もできるんかい！
「テラーさん、アタシ負けませんから！」
「モシモシ！」
「ラプ！　ラプラプラー！」

「サイコキネシス」
　アニポケ同様チート級の技。練習すれば人を運べるようになる。
ただし、頭痛や目眩がする。

　～以下回想～
「ねえ、テラー。僕の事『サイコキネシス』で運べたりしない？」
「ラプー？」
「うん、やってみてくれない？」
「ラプ。ラープー・・・！」
　ふわっと浮いた。
「おお！　すごいすごい。いい感じだね。良いねこれ、すごい楽だよ」
「ラプ、ラプラ」
「・・・。・・・　ごめん、テラー。ちょっと1回下ろして？」
「ラプ？」
　ふわっと着地
　瞬間、
「うっ・・・。やっぱり・・・。あたまちょーいたい。吐き気すごいわ」
「ラ、ラプラー!?」
　緊急時以外使うのは控えます。

「エナジーボール」
　サイキネ同様。タイプ一致じゃない分威力、速度は控えめ。元気○
みたいなイメージで緑の多いところだと威力ｕｐ

～以下回想～
「エナジーって言うから何となく元〇玉みたいに自然とかからお力を頂いてると思うんだ」
「ラプ」
「そうなのですか!?」
しらんけど
「だからまず自然と一体化することが大事だと思うんだよ」
「ラプ」
「なるほど、流石兄さんです！」
てことで、
「ほら、この辺とかいいんじゃ無い？」
「ラプ～」
「わあ！　緑がいっぱいなところですね！」
「・・・　モシ」
とある自然保護区にピクニックしにやってきたぞ！
ここには色んな珍しいポケモン達がいるらしいけど・・・
「ぐぅ・・・」
「ｚｚｚ・・・」
「すぅ・・・」
「ｚｚｚ・・・」
４人で寝ただけだった。

とりあえずはこんな感じかな？

でも、なんかシキミちゃんのほうが完成度高い気が・・・。
凄いなこの子・・・。さすがは未来の四天王だよ。才能が違いすぎるぅ。

シキミちゃんの言葉を借りるならまさしく・・・

「・・・　唖然呆然」

「あぜんぼーぜん？」

うん、子供っぽい発音がより本物っぽい。

・・・　いや、本物か。

これからもっと難しい言葉を知って行こうね？

また頭を撫でる。

「ラプー！　ラプラー！」

え、なんか一人で「しっとのほのお」覚えてるんだけど・・・。

ど、どしたん？

ヨロイ島行ってきたの？

・・・　あと、「しっとのほのお」こっちに向けないで？　普通に危ないよ。

そんな日常の一コマ。物語の幕間。

幕間　―日常の１日を―

僕、サフラの１日は可愛い女の子２人から起こされることから始まる。

７：００

「兄さん、起きてください。朝ですよ？」

「ラップラ～。ラプラ～」

まあ、妹とランプラーなんだけど・・・。

羨ましい？

知らんよ。この家に生まれなかった自分を恨めば？

１人で起きろ？

・・・。うんそうだよね。

僕ね、自慢じゃないけどどうしても朝がすっごく苦手なんだよ。

これは前世からだから仕方ない。うん、仕方ない。ああ、仕方ない。

「シキミもテラーちゃんも１人で起きてるんだからサフラも頑張りなさい」

ってよく言われてるんだけど、頑張ってこれだからねぇ・・・。

もう諦めなよ。

一生かかって無理だったんだから無理なものは無理だよう・・・。

さて、朝起きてまずするのは朝の部の日課。

鐘つき。

最近はシキミちゃんも付いてくるようになった。

そしていつも通り右手にシキミちゃん、左手にテラーちゃんと手を繋いで行く。
毎回思うんだけどこれちょっと歩きづらいんだよね。

タワーオブヘブン。
その2階につくとこれまたいつも通りのお出迎えがあった。

「「お還りなさいませ、サフラ様!!」」

もう慣れた。慣れたからこそ何も言うまい。
前にも言ったけどその還りって怖いからやめてよぅ。（当たり前のように言葉を理解してる）
あと何で僕だけなん？　2人は歓迎しないの？

後々判明したことなんだけど2人ともこの子たちの宗教、サフラ教とかいう狂った宗教に入信してたらしい。
え、なにしてん？　マジでやめてよ。
しかも幹部。
・・・。もう本人たちが楽しいならそれでいいや。

気を取り直して、日課を遂行しようか。
2階からはこの中のヒトモシたちが何班かに分かれて日替わりで護衛してくれるのだと言う。
ま、特に塔の中は全然安全だからただのお散歩だね。
うん、だからさ？　そんなくっ付いて歩かないで？
逆に危ないよ・・・。
多少あったけど特に危なげなく屋上につき鐘を鳴らした。

「やっぱりサフラ様が鳴らすと違いますね」

ってんなわけあるかい。

誰が鳴らしても同じでしょうが。
さて、鐘も鳴らせたから2階まで戻りみんなとバイバイして、家に帰る。
又お昼にも来るんだから一々別れ際に泣かないでよ・・・。

7：30
いつもだったら学校の準備にバタバタしてる時間だけど今日は休日。
朝ごはんだってゆっくり食べれる。

「兄さん兄さん、アタシ今日はうまく食べれないみたいです。食べさせてください！」

それいつも言ってない？
あとお父さんかお母さんに頼みなよ・・・。

「ラップ、ラ～プ。ラプラ」

テラーちゃんもいつも1人で食べてるでしょ？

「あらあら、3人ともホントに仲がいいのね」

のんきに言うお母さん。
まあ、お母さんはほかの家事とかしてもらってるもんね。
・・・いつもありがとうございます。

9：00
さてと、ご飯も食べたしちょっとグダグダしようか。

と思ってたら1時間位経ってた。

「兄さん兄さん、今日も特訓しましょ！」

「え～？　あ、うん・・・」

グダグダに飽きたのか特訓したがる妹１人。
めっちゃやる気のシキミちゃんと怠惰な僕。
温度差がすごいな。
でもね、テラーもほら、グターってしてる。
めっちゃ怠けてんじゃん。だれに似たんだよ・・・。全く。
そもそも今日は休日、休みの日くらいゆっくりしたい。
てことなんで、シキミちゃんをこっち側（怠惰）に引き込もう。
でも相手は遊びたい盛りのシキミちゃん。そんな元気っ子を引き込むのはいくらなんでも難しいんじゃ

「シキミちゃんも一緒に寝ｙ――」

「――寝ます」

簡単だった。しかも食い気味。
ギュッとしてくる。うん、やっぱりちょっと苦しい・・・。
いつの間にかテラーもくっついていた。
まあ、いいや。このままほんのすこーしだけ――

１２：００
――起きたらお昼だった。

・・・。休日の１／４消えたんだけど。
これじゃあ前世と何も変わらん。せめて午後からは遊ぼう。・・・
あ、違う違う。修行だ。
ご飯食べたりお昼の日課済ませたりでもうこんな時間。

１３：００
よし、今度こそちゃんとしよう。

１４：００
うん、今から始めるよ。

１５：００
おやつうまー。

１６：００

「テラー、『シャドーボール』」

「ヒトモシさん、こっちも『シャドーボール』です」

１７：００

「もう暗いし戻ろっか」

「はい！　今日も特訓楽しかったです！」

２２：００
その後、ご飯食べたりお風呂に入ったり夜の日課に行ったりするともう寝る時間だ。
因みにシキミちゃんのヒトモシさんはお風呂嫌いらしい。寝るときもボールの中が落ち着くんだって。
そんなこんなでおやすみなさい。

ところでシキミちゃんもう自分の部屋があるって知ってた？　そこに君のベッドもあるんだけどね？

…　あぁ、はいはい。おやすみ。
僕、サフラの1日は大体こうやって溶けていく。
…　あれ？　今日シャドボ2，3発しか撃ってなくない？
そんな日常の一コマ。物語の幕間。

第9話　3年後、タワーオブヘブンで

はいっ。なんやかんや修行してたりしたらそこからまた2年経ちましたよ～。

もう少し時の流れを頑張って欲しい？
ま、まだ幕間つけたんだからいいでしょ!?

・・・そ、そりゃね、メインパートじゃないんだから。前日談とかは、サクサクいくよ？

（作者も）こんがらかってきたから説明するけど、僕は今１０歳。
あら、もう旅出れるじゃん・・・。

そんでシキミちゃんはもう5歳。
学校にも通ってお友達もいっぱい！（誰かさんとは大違い）

そんなシキミちゃんのお友達が遊びにやってきたぞっ！

「・・・シキミちゃんのお兄ちゃん、カッコイイ・・・！」

この子の感性バグってない？（おまいう）

あ、危ない危ない。勘違いしてしまうところだった・・・。（めっちゃ勘違いした）

この子くらいの年頃ってのは年上の大人とかに憧れたりするもんだ。
皆様もそんな経験無いですか？

僕は・・・ んん、やっぱり覚えてないや。

でもでも、歳上に惚れることって結構あるらしい。

それも暫くすれば覚めるらしいけど。

・・・ だからこの子が今抱きついてきてるのもそのうち終わると思えば、

「・・・・・」

し、シキミちゃん・・・。

兄が取られたからってそんなに怒らないでくださいよ・・・。

僕はいくつになってもシキミちゃんの兄ですよ?

「ラプラ! ラプラ〜・・・」

テラーちゃんもそんな怒らないで・・・。

この子シキミちゃんのお友達だから・・・。 お友達は大切にしなきゃなんだよ? (何やら悲しい過去がありそう)

2人の乙女を気にせず元気なお友達は僕の腕をグイグイ引っ張って、

「おにい〜さ〜ん。私に、ポケモンバトル教えてください!」

そんなことを言ってきた・・・。

いや、シキミちゃんの方強いからシキミちゃんに聞きなよー。

前世からポケモン図鑑というものが存在する。

ポケモン図鑑と言うのはポケモンを登録するだけではなく、こっちではポケモンバトルにも用いられる事がある。

まあ、基本的にはトレーナーがポケモンの様子を見て判断するんだけどね。

ポケモン図鑑で手持ちポケモンの残り体力や使える技なんかもわかるらしいけど、そんなものに頼ってるくらいじゃ二流三流もいいとこだろう。

真のポケモントレーナは相棒の目を見て判断できる。

「だよね、シキミちゃん」

「え。い、いえ。そんなことできるの兄さんだけだと思いますよ…？」

あ、あれ？

「ふわぁー！　お兄さん、すごいです！」

場所が変わってうちのお庭。

ここでバトルについて教えてみようと思ったんだけど何なら問題発生。

【個体名サフラの特殊能力が強化されました】

あ、またお前。

サフラ
特殊能力：シャンデラ族の詳細判断・ステータスチェック　Ｌｖ５
（↑ＵＰ!!）

なんか一気に上がった？

そんな幻聴に耳を貸していると、

「お兄さんお兄さん！　どーやったらそんな風になれるんですか!?
私にも教えてください！」

まーたお友達ちゃんが腕にくっ付いて来た・・・。

何でしょうね？　腕にしがみつきたいお年頃なのでしょうか？
・・・てかこの子の名前知らんな。なんていうんだろ？

「に、い、さ、ん！　アタシも！　その方法！　詳しく知りたいです！」

分かりやすく怒って腕にギュウーって、いたいたいたいたいって、
血ぃ止まるぅよう・・・。

「・・・」

めっちゃジト目のテラー。
うん、ジト目も可愛い。

「ねぇねぇ、お兄さ～ん。どうやったら私にもできるようになります
か～？」

むぅ、方法って言われても知らないんだけど・・・。

「ぼ、僕がわかるって言ってもあくまで憶測でしかないし・・・。そ、それに僕が勝手にわかってるつもりなだけで実際は違うかもよ？」

慌てて無能力だと主張する。

「そうなんですか？　あ、じゃあじゃあ、私丁度ポケモン図鑑持ってるんで、お兄さんテラーちゃんでクイズしましょ？」

「え、あ、うん。わかった。いいよ」

とは言ったもののどうしようか・・・。

今更だけど適当に答えてしまえばさっきのはただの僕のカッコつけだけで済む。

全問正解でもしてしまえばまた秘訣を問われるかもしれない。秘訣なんて知らないしそろそろシキミちゃん側の腕も限界が近い。

なんか変色してるの。

じゃあ、適当に答えるか。

って、決めようとした瞬間。テラーが視界に入った。

良いのか？　自称ではあるけど前世からシャンデラ一家のファンを名乗ってた僕が、今世でテラーという最高の相棒を手にしたこの僕が、そのテラーの事で「適当に」なんて答えて・・・。

違うだろ。

テラーの相棒なら、シャンデラ一家のファンなら、全問正解なんて、

「・・・す、凄いです！　お兄さん！　本当にテラーちゃんのことなんでも分かっちゃうんですね！」

「に、兄さん凄いです！」

余裕に決まってるだろ。

あーあ。仕方無いとはいえ見たまえ、この子達の盛り上げりよう。マジでなんて言えばいいんだろ。

・・・。

ま、いっか。

「ラブ～♡　ラブラ～♡」

テラーちゃんが幸せそうだから。

「それで、お兄さん！　どうやったら分かるようになるんですか!?」

やっぱりあんまり良くないわ。

因みにその後適当に

「自分のポケモンといつも一緒にいて、常にその子のことを考えるようにすれば自然とわかるようになるよ」

って誤魔化しておいた。

うん、２人ともめっちゃ納得してたし、何とかなったかな？

「やっぱりカッコイイです！　お兄さん、私が大人になったら私と結婚してください！」

「!?」

何とかならなかったわ…。

第１０話　遠足の前日、子供は寝ることが出来ない

まだ日も出てない早朝

何日も前から準備していた荷物を持ち玄関に立っている子供が２人いる。

１人は未来の四天王、現在１０歳なりたてほやほやのうら若き少女。

綺麗な紫色のボブカットと丸眼鏡が特徴の少女。

僕の自慢の妹、シキミちゃんだ。

もう１人は自称前世の記憶持ち。中二病かよｗｗｗと笑われてしまいそうなその設定。

野暮ったく伸びた黒の前髪は両目を覆い、宛らギャルゲ主人公のよう。

朝早くに起こされて眠たい僕、サフラだ。

…　いや、めっっちゃ眠いの。

そもそも今だっていつも寝てる時間だし、昨日はシキミちゃんがずっと、

「明日は楽しみですね」

って言ってきて寝れなかった。

なぜか当の本人は睡眠時間僕と同じはずなのにめっちゃ元気だし…。

ははっ…。子供は元気だね（１５歳）

ん？　時間が進んでる？

子供基準と大人基準では時の流れの感じ方が違う。前世では確か僕は・・・何歳だったかな？　それプラスで今の歳が換算されるからね・・・。シキミちゃんとの時間の感じ方が・・・

・・・ああ、もう！　そーだよう！　また時飛ばしだよ！

・・・電車の時間もあるんだしそろそろ行こうか。

ここイッシュ地方も原作のガラル地方同様各町に駅があって電車でＧＯ！ってすることができる。

それにより空を飛ぶ要因がいなくても様々なところへ行くことができる。

ゲーム時代にはなかった便利要素ですね。

さてと、

「シキミちゃん。忘れ物はない？」

「はい！　準備万端です！」

よし。

「じゃ、行ってきます。父さん、母さん」

一生の別れって訳では無いけど、一気に子供２人が旅に出るんだもんね。

ちょっとしんみりしちゃうね。

「シキミ、頑張れよ？　サフラ、シキミのこと頼んだぞ」

と、そんな事を言ってくるお父様。

もぉー、僕は実年齢よりも年取ってんだよ？

そんな事言われなくてもわかって・・・

「3人とも、サフラをよく見張っててくれ」

おい。

「いってらっしゃい。3人とも、サフラのこと頼んだわよ？」

おいて。

・・・。

「・・・　それじゃ、行こうか」

「はい！」

「ラブ～」

「シャーラ―」

――――あ、そういえばシキミちゃんに進化越されたんですよ。

え？　電車内の様子？

…　生憎誰かさんは乗って速攻で寝たらしいですよ？

思い出と言ったら起きた時に３人に寄りかかられてたってことくらいかな？

…　なんか寝苦しいと思ったら。

そんなこんなでやって来ました、カノコタウンー。

いやー、なんもねーな。

原作では家が少ないようなところにも大抵は何かしらあるんだけど、ここにはホントに何も無かった。

よし、アララギ研究所も主人公と幼馴染たちの家も見れたし、ここにはホントになんもないから１番道路に１歩踏み出してみようか。

…　ＢＷの最初、１番道路に３人で１歩踏み出すのすごい好きなんだよね。

そんなわけで僕たちも横１列に並んでやってみた。

はいせーの、はーじめのいーっぽ！

…　うん、感動とかは特にないね。

「「???」」

シキミちゃん達も疑問符浮かべてるよ…。

よし、気を取り直して進もうか。

…　なんか後ろから3人くらいの視線と、
「ボクたちもあれやってみようか」
とか聞こえた気がしたけど気のせいかな？
気のせいだよね？

ま、いっか。
そのままこれまた特に何にもない1番道路、カラクサタウン、2番道路を抜けて最初のジムがあるサンヨウシティに到着。

――さあ、1個目のジム行ってみようか。

第11話　ＶＳ　３色猿３兄弟

シキミちゃんの手持ち探し＆ジム挑戦の旅が始まった。
ということで早速１つ目のバッジを得るためにサンヨウシティにやってきたんです。

別にジムの回る順番なんかは定められてはないけど僕は原作勢。
原作通り回らずしてどう回る!?（他に考えるのが面倒なだけ）

１０年前は四天王もジムリーダーも全然知らない人達だったりしたけど今となっては殆どがよく知る人達になっている。

ギーマさんとカトレアちゃんはまだだった。

さあ？
今頃ギャンブルとバトルフロンティアじゃない？

おっと、シキミちゃんの将来の仕事仲間のことなんて今はどうでもいいんだ。

サンヨウジムがあるでお馴染みのサンヨウシティ。

ふわあー。原作でもマンションみたいなのがあったけどやっぱりアルはちげーなー。
団地みたいだぜ（行ったことない）。

トレーナスクールとか噴水のある広場とかあっていい感じだね。

近くに夢の跡地たる施設があることなので後で行ってみようか。

でもまずは早速ジム～って思ったんだけど・・・

「ねえねえ、どうしたらいいと思う!?」

「し、知りませんよ・・・」

なんかトレーナーのレポートがどうのこうの言ってくる研究者みたいな人に絡まれてるんだけど・・・。

シキミちゃん、テラーちゃん、シャンデラさん助けて・・・

「に、兄さんがまた女の人といちゃいちゃいてます・・・！」

「ラプ～・・・！」

「・・・」

シキミちゃん、またって何・・・。

テラーちゃんもそんなに怒らないでよ・・・。

シャンデラさんは無言なのが怖い・・・。

いやあの、とりあえずホント助けて・・・？

とりあえず話を聞こうとして気づいた。

この人ストーリーに出てくる人じゃね。

て事は僕が解決したらダメじゃん。

なので、

「あの、よく聞いてください。あなたは数年後、眼光の鋭い殺意の高そうな無口な子供に出会います。その子は・・・」

主人公を売ることにした。

いやいや、面倒だからじゃないよ。ストーリー変えたらダメだからね？

・・・ 何年後に来るかは知らないけど。

さ、気を取り直してジム行こっか。

「ようこそ。こちらサンヨウシティ、ポケモンジムです」

アニポケでお馴染みのデントさん（ｃｖ．宮野真○）が挨拶してくれる。

あ、はい。もうリーダー戦ですよ？　途中の仕掛けなんてあってないようなもんでしょ・・・。

いい声のデントさんがそう言いお辞儀をするとくるりと回りながらデントさんの後ろから誰か出てきた。

・・・ 今の演出横から見たら台無しなんだろうなぁー。

「オレはほのおタイプのポケモンで暴れるポッド！」

あ、はい。７２０位お疲れ様でしたー。

またくるりと誰かが出てくる。

「みずタイプを使いこなすコーンです。以後お見知り置きを」

あ、はい。僕は三猿の中でヒヤッキーが1番嫌いです。

「そしてぼくはですね。くさタイプのポケモンが好きなデントと申します」（ｃｖ・○野真守）

こんにちは、デントさん。あなたいい声ですけどアニポケでくさタイプはヤナップしか使ってなかったじゃないですか？

挨拶も程々に早速初めて行こうか。

「君の手持ちは1体みたいだから、２対２。ぼく達３人の誰かとタッグを組むってことでどうですか？」

「ああ、いんじゃないっすか？」

この様にジム戦に決まった戦い方はなく、向こう側が勝手に決めたり、此方に向こうが合わせてくれたりする。

ほんなら僕は側から眺めるとするか。シキミちゃんなら余裕でしょ。

「じゃあ、早速誰と組みた・・」

「アタシ、兄さんと組みたいです」

え、何で僕？

「ほう、分かったいいよ。君たちが勝ったら2人にバッジを上げよう」

いや、僕は別に要らないんですけど・・・。

「はい、お願いします！」

勝手に決めんで？

でもまあ、僕はシキミちゃんのサポーターだからねえ。

やるかー・・・。

「じゃ、すんませんそれでお願いします」

「それじゃ、審判は僕が執り行おうか」

と言って自ら審判を名乗り出てくれるｃｖ．宮野○守のデントさん。

いつ聞いてもいい声っすね。

てことで早速始まってしまった。

「それでは、ただいまより挑戦者シキミ、サフラペア対コーン、ポッドペアのジムバトルを開始します。

・・・バトル、スウッタァ――――トッッ!!（宮○真守風テンション）」

いつも通りのテンションで安心しました。

「俺たち兄弟のコンビネーション受けてみろ！

行くぜバオッキー、『ほのおのちかい』！」

「行きますよヒヤッキー、『みずのちかい』です」

そして2つの技が合わさって・・・！

・・・って、なんか長々やってるけどさ、

「『シャドーボール』」

バオッキーとヒヤッキーは倒れた！

――――発動が遅い！（鱗○さん風）

あ、あれ？

まさか一撃でやられるとは・・・。

「君たちにこのバッジは相応しいだろうね」

と、実にあっさり勝利してしまった。

え、ジムってみんなこんなに余裕なのかな？

（な○う主人公）

・・・まいっか、はい次ー！

第１２話　ＶＳ　博物館の褐色ママ

さてと、夢の跡地も特に何も無かったから次の街行こうか。

はい、道中になんの魅力もなく到着ですよ。シッポウシティ。

「わあー！　この街も素敵ですね！」

シキミちゃんがはしゃいでる。

ふ、まだまだ子供だね・・・。

僕くらい大人になればそんな事ではしゃい・・・

あ、見て！　廃線路がある！

歩いてみようかな!?

ＢＵＭＰ様のアカシアみたいですね。

あれめっちゃ好きなんすよ。いいですよね。

スタンド・バイ・ミーごっことかしたかったけどシキミちゃん達は訳わかんないって感じだったね。

ちょっとポケセンで休憩したらジム行こっか。

うん、僕が座る度に３人で膝の上奪い合うのやめて？

「ほーう。コレが数年後盗まれる化石ですか…」

中々見事な…。

うん、わかんねぇわ。

「え？　この化石盗まれちゃうんですか？」

あ、やっべ。シキミちゃんにネタバレしちゃった。

「あ、ううん。何でもない」

「？　そうですか？」

ま、いっか。ジムに行こうか。

このジムの仕掛けは本棚の本を調べてクイズに答え次の本棚に行く、みたいな感じだった気がする。

まあ、僕はそんな面倒なことしないけど。

「え～っと。確かこの棚を動かせば…！　ほーらここだ。さ、行こ？」

「え、あ、はい！」

ジムトレーナーさん達もなんか唖然としてるけどどうしたんだろ…？

別に初手でここ開けたらダメじゃないでしょ？

階段を降りるとアロエさんが待ち構えていた。

激励の言葉でシキミちゃんを送り出す。

「それじゃ、シキミちゃん。いつも通りでいいからね」

「はい、行ってきます・・・。あ、あの兄さん。やっぱり兄さんもジムに挑戦しませんか？」

「え？　いや、僕はいいよ。僕はシキミちゃんのお手伝いで来ただけだからね」

「あ、はい。そうですか・・・」

な、なんかガッカリしてる。

どうしたんだろ。

「いらっしゃい。シッポウ博物館の館長にして、シッポウジムのジムリーダー、それがこのあたしアロエだよ！」

何年後かにはジムじゃなくなるけどね。

おっと、これもネタバレか？

「さあ、挑戦者さん。愛情込めて育てたポケモンでどんな戦い方するのか研究させて貰うよ！」

その言葉で勝負が始まった。

そこからシキミちゃんの圧勝で――――

…のはずだったんだけど。

「どうしたんだい。ほら、あんた達ならまだやれるだろ？」

え？　シキミちゃん負けた？

…？

？

え、あ。ま、まあ、プロでもいつかは負けることあるし…。

うん、ね。

なんて言葉をかければいいのか迷っていると、

「あ、あー。負けてしまいましたあー。に、兄さーんお手本を見せてくださあーい。」（棒）

どしたん？　なんかすげー棒読みだけど。

あと思ったより元気だね。

もうちょっと落ち込んでるかと思った。

何てかお手本？　シキミちゃんになら必要なさそうだけどまあ、いっか。

そんなこんなでシャンデラさんを回復させてから再挑戦。

て言っても僕だけど。

「おや、アンタが次の挑戦者さんかい？　じゃあ、改めて。

いらっしゃい。シッポ・・・」

あーいえ、それはもういいです。

「ウットリするほどのえも言えぬ戦いっぷり！　このベーシックバッジを受け取るにふさわしい」

はい、特にお手本になるようなことも無く勝利。狙ってもないバッジを貰いましたよ。

・・・でー、どうかな？　こんな感じで。お手本になった？

「はい！　バッチリです！　今なら勝てる気がします！」

そ、そう？　だったら良かった。

シキミちゃん大丈夫かな？

とか思ってたけどシキミちゃん、実にあっさり勝ってしまった。

・・・え、さっきのってホントに負けたの？

実は僕にもバッジコンプリートさせそうとしてない？

「はい、ごめんなさい。実はそうなんです・・・」

あ、ホントにそうなのね。

「どうしてそんなことを？」

「だって！　兄さんはアタシよりも凄いんですよ!?　それなのにアタシよりバッジが少ないのはおかしいんです！」

む、確かに。いくら強いっ言い張ってもバッジが少ない様じゃ強さの証明になりづらいね。（あまり話が通じてない）

前にも言ったけど四天王シキミの家族、増してや兄がバッジ1、2個では恥さらしもいいとこだろう。

・・・　しょうがない。少々面倒だけどシキミちゃんのためだしね。

「わかったよ。それじゃあ僕もちゃんとジムに挑戦しようかな」

「本当ですか!?」

「うん。あ、その代わりもう今日みたいにわざと分けるなんてことしないでね？　相手にも失礼だし、シャンデラさん可哀想だよ？」

「はい・・・。ごめんなさい、シャンデラさん、アロエさん」

「シャーラ」

あ、良かった。シャンデラさん気にしてないみたい・・・　てかアンタも共犯だろ？

「何なんだい、アンタら・・・」

あ、すんません。

そりゃ、1度負けた子が再挑戦で放射ワンパンだったらビビるわな。

もう1回ごめんなさいしてその場を後にした。

第13話　VS　廃人ロード

突然だけど皆怖いものってあるかな？

初めから嫌いだったものもあるし何かが切っ掛けで嫌いになることも・・・。

僕の場合後者なんだけど旅の続行が疑われる程の事態になってしまった・・・。

それは何か。

え、タイトルでバレバレ？

あそっか。

じゃあもう言っちゃうけど、それは今作（？）の廃人ロードこと、スカイアローブリッジ――――

――――から走ってるのが見えるトラックだ。

ブロロロロロロロー！（トラックのエンジン音）

そんなエンジン音が（あれはエンジン音だよ）がなる度に、

「ひぃ!?」

女の子みたいにビビっておる。

なっさけねー。

これが判明したのはつい先程。

ジムバッジを貰えたからヒウンシティ向かおっか、って事でシッポウシティを出てこれまた何も無かったヤグルマの森を抜けて・・・

～以下回想～

「おい！　そこのお前！　俺と勝負しろ！」

フシデを連れた虫取り少年が勝負をしかけてきた。

「え、あはい。テラー」

「ラプー！」

「『かえんほうしゃ』だ」

「ラプー！」

「ああ!?　フシデ!?」

フシデは倒れた。

が、「かえんほうしゃ」の威力が高すぎた。

メラメラメラ・・・（1本の木に当たってしまった）

「いや～！　負けた！　兄ちゃんつえーな！」

「え、あども」

メラメラメラメラメラメラ・・・（隣の木にも燃え移った）

「ほら、賞金だ！　俺もっと頑張るぜ！」

「お？　おう、頑張れ？」

メラメラメラメラメラメラメラメラ・・・（なんかその一帯燃えてる）

「おう！　それじゃあ俺はもう行く・・・　ってなんか燃えてる!?」

「え？　あーホントだ。なんでー？」（犯人）

「兄さん・・・」

「と、とりあえず消すぞ！」

「お、おう。手伝うわ」（当然）

「兄さん・・・」

さすがに気づいたのか周りのトレーナーさん達も騒ぎ出した。
「はいだらー」「はいだらー」
「らりるれ火事だー！」
おいおい、あんまふざけてる時じゃないだろ？（おまいう）
周りのトレーナーさんたちの協力やシャンデラさんの「もらいび」もあり何とか消火することが出来た。
全く出火元はどこなんだ。危ないったらこの上ないな。
皆様も燃えやすいものがある近くでの火の取り扱いには十分注意しましょうね？
「兄さん…」
～回想終了～

うん、特に何も無かった。
無かったから心配すること無く歩いていき橋にかかった時。

「…！」

脚がすくんだ。

「…!?」

動かなくなった。

「うん？　兄さん？」

やばい、どうしよう。

少し震えてきた。

「兄さん!?　ど、どうしたんですか!?　大丈夫ですか!?」

「ラプ!?　ラプラ!?」

「・・・　シャーラ?」

体温が下がっていくのを感じる。

「か、顔が真っ青ですよ!?」

あ、やっぱり?　そんな気したわ。

後なんか息が苦し・・・

「過呼吸になってますよ!?　お、落ち着いて下さい！」

う、うん。え～っと、あとは・・・。

あ、後ね。喉がかわ・・・

「喉が乾いたんですか!?　はい、どうぞ！　水です！　あ、アタシの飲みかけ・・・　ですけど。き、きき緊急事態なので！　さ、ささあ！　どうぞ！」

うん、ありがと。そんな慌ててどした?

あとさっきから微妙に僕の感情先読みしてない?

・・・　ふう。水飲んだら落ち着いたよ。

「ありがと、シキミちゃん。あ、水筒ありがとね」

シキミちゃんにお礼を言い水筒を返す。

「いえいえ！　兄さんが無事なら良かったです。・・・　あ、アタシも喉が乾いたので飲みますね！」

めっちゃ顔を赤くして水を飲むシキミちゃん。

どした？　顔赤いよ？　熱でもある？

熱は無いらしく話は僕のことに戻った。

「それで兄さんはもしかしてトラックが怖いんですか？」

「・・・　うん、そうみたい」

正しく言えばあの事故でも保険は適用されているのか、保険金はちゃんと遺族に残せたのだろうか。

もし適用されなかった時のことを考えただけで震えて震えて・・・。

え？　いや別にトラック自体が怖い訳じゃないよ？

でも流石にこの話をシキミちゃんにする訳には・・・。

まだこの歳だし保険のこととかわからなそうじゃん？

あ、違うか。前世の話か。

うん、それはまだ隠しておこうかな？

・・・　時期が来たらその時は話すよ。

あ、保険の勉強じゃなくてね？　前世の話ね。

それはそうといくら（保険が）怖くてもこの橋は渡らなくてはいけない。

て事なのでシキミちゃんとテラーちゃんとシャンデラさんに手伝ってもらった。

ブロロロロロロロー！（トラックのエンジン音）

「ひ!?」

「あ、大丈夫ですよ。兄さん。（怯えてる兄さん、ちょっと可愛い・・・）」

「ラプラプ」

「・・・　シャラ」

1台通る度にこんな感じで向こう側に着くのにめっちゃ時間かかったぜ。

妹達に手を繋いで支えられながら橋を渡った情けない兄がいるってまじですか？

・・・　そういえばあの時の暴走トラック、誰も乗っていないように見えたけど・・・。

気のせいだよね。

幕間　―ＶＳピンクの悪魔―

ゲームみたいに２４時間以内に全ジム渡れる訳ないのでどんな生活してるのか簡単にですけどね。

ま、ほぼ毎回こんな感じだよって感じで覚えておいてね？

「いらっしゃいませー。今日はどうされましたか？」

いい笑顔でそう言ってくれるのはポケモンセンターの受け付け（？）にいるジョーイさん。

本当にアニポケみたいに全員同じ顔なんすよ。全然見分けつかん。

「あ、えっと。宿を探してるんですけど、まだ部屋は空いてますかね」

当然な様にポケモンセンターは宿泊施設でもあった。まあ、中身は前世のビジネスホテルみたいな感じだけどさ。

「はい、少々お待ちくださいね。……。はい！　まだお部屋は空いていますよ。何部屋ご利用ですか？」

良かった。野宿はやだからね。

部屋を別にしてもどうせシキミちゃんが1人では寝れなーいって言ってくるから…

「1部屋です」

シキミちゃん、四天王になったら大丈夫かな？

1人で寝れる？

「はい。うふふっ。お2人はカップルさんですか？」

ジョーイさんが茶化してくる。

・・・なんかこれ結構な頻度で言われてる気がするんだけど。

そんな兄妹に見えないかね？

「あ、いえ、兄妹で・・・」

「は、はい！　カップルです！」

シキミちゃん？

「あらあら、うふふっ。お若いカップルですね。美男美女で羨ましいです」

「は、はい！　にいさ・・・さ、サフラは！　カッコイイですから！」

え、やめて？　何このいじめ。

シキミちゃんが美（少）女なのは認めるけど僕は美男て訳でもないからね？

ほぼ前世の顔同じなんだよ？

鏡を見る度にこの顔が見えるのが嫌だから髪伸ばしてるんだけど？

「それでは鍵をどうぞ。うふふっ。あまり大きな声は出さないでくださいね？」

「？」

１０歳相手になんてこと言ってんだよ。

「…　それじゃ、行こっか」

「はい」

「うふふっ。ごゆくっり～」

…　怒るよ？

あとさ、

「ラブー…　！」

ペシペシペシペシ…

「……」

ペシペシペシペシ…

ずっと２人で叩いてくんのやめて？

まあ、あんなこと言われたけど特に特別なことは無く、食堂で夜ご飯を食べたらいつも通り一緒にお風呂に入って、

え？　うん。いつも通りだよ？

ベッドは２つあるのにいつも通り僕と同じベッドで寝て、

うん。だからいつも通りだって。

で、起きたらいつも通りシキミちゃんとテラーちゃんに挟まれなが

らいつの間にか起きてたシャンデラさんがお腹の上にいた。

そうだよ。いつも通りなんだよ。

いつも起きたら腕は痺れてるし、お腹に乗っかってるし地味に大変なんだよ。

朝の支度をしてから食堂で朝ごはんを食べて荷物をまとめてから再び受け付け（？）へと向かった。

「すみません、チェックアウトお願いします」

ジョーイさんに鍵を出す

あ、やっべ。この人昨日と同じ人だ。

・・・多分。

「はい！　ご確認しますね。・・・　あら？　あらあら昨日のカップルさん。うふふっ。昨日はお楽しみでしたね？」

いや、してねーよ？

お前さんの望むことなんてしてないから特別なベットの掃除も要らないし至って綺麗だ。

「・・・？　はい！　楽しかったです！」

シキミちゃん、適当なこと言わんで？

「まあ！」

顔真っ赤にしてびっくりしとるやん。
処〇か（最低）

「またどうぞー」

いや来ねぇから！

そう思いながらポケモンセンターを出る。

・・・。

「あ、やっぱりポケモンの回復だけ・・・」

「はい、お預かりします」

そんな旅の一コマ。物語の幕間。

第１４話　ＶＳ　都会の洗礼

はえ～。やっぱすっげーな。

イッシュの中心部、大都会のヒウンシティ。

ビルが何棟も何棟も立ち並ぶその景色は宛ら前世で見た東京のよう。

ま、東京行ったことないんだけどね。むしろ行く途中でタヒんだし・・・。

それにしても、

そんなコンクリートジャングルで僕は――――

シキミちゃん何処だろ・・・。

――――当然のように迷子になっていた。

ど、どうしよう・・・。

迷子センターとか行ったほういいのかな？

じゃあ、迷子センターってどこだ？

いや、断じて僕が迷子になった訳では無いけどね？

そもそもここはどこら辺なんだ？

辺りを見回して見ても見えるのは同じようにしか見えない建物のと夥しい数の（失礼）人達。

前世でも今世でも都会は行った事ないからね。慣れてないんだわ。

因みに人がいっぱいいるから危ないってことでテラーさんには久しぶりにボールの中に入っててもらってる。

時々声が聞こえてくるような気がするんだよ。

うだうだ狼狽えていたらスマホが鳴った。

うん、スマホだよ？

スマホロトムじゃないけど図鑑との連動もできるしＬＩ○Ｅみたいなのもある。

普通に便利なんすよね。

とりあえず電話に出る。

「あ、もしもし兄さん今どこですか!?」

あ、良かった。シキミちゃんからだ。

シキミちゃんは子供だからね。迷子になるのも無理はない。

全く、まだまだ子供ですね。やっぱり僕がしっかり見張ってないと・・・

「どうして目を離したらすぐ迷子になってしまうんですか!?」

・・・　恥ずかしんだろうね。自分が迷子になったて言うのは。うん。

「えーっと今広場の噴水なんだけど・・・」

原作ＢＷではダンサーを集めるイベントがあった噴水。
今では集合場所として有名らしい。
「分かりました。今からそっちに行きます。なのでまた１人でどっか行ったりしないでくださいね！」
またとはなんだ。まるで前科があるように。
そしてその言い方。僕は子供かな？
「う、うん。あ、シキミちゃんは今どこ？」
「アタシはさっきまで兄さんと一緒にいたポケモンセンターですよ？」
あ、さっきまでいたところだ。
・・・なんで僕はここにいるんだ？
実は僕はダンデさんだったのか？
電話を切ってそこで待っていると誰かが近づいてくるのがわかった。
シキミちゃんもう来たのかなって思ったら、
「あの～お兄さ～ん、今お暇ですか～？」
同い年くらいの２人の女の子に声を掛けられた。
あ、この前のシキミちゃんのお友達じゃないよ？

どうして僕は待ち合わせが上手くできないんだろうな。

普通に考えてみろよ、こんな落ち合わせの名スポットで1人でいると思うか？

なんてすっと言えれば良いのに生憎僕はコミュ障陰キャ。当然出てくる言葉は・・・

「あ、あの。えっと」

うんこれが限界。

「良ければ～私達と～お茶しませんか～？」

悪いけどここで人を待ってんの、ここにいろ勝手にどっか行くなって言われたからここに居るの。

「ええっと、あの」

「あはっ、かっわい～」

「照れてる～」

照れてない。ビビってるだけだ。・・・　いや、ビビってねぇけど。

ちくしょう。これが最近流行りのメスガキってやつなのか？

あ、ムーンボールがすごく騒いでる。

「ねえねえ、お兄さん、甘いもの好きですか？」

「私達と甘い物食べに行きません？」

「行きます」

1人でどっか行くなって言われてるから誘われたらいいんだろう。

うん。良いよね？

そんな事でやって来たのはヒウンアイスでお馴染みのあの屋台。

流石に特定の時間でしか買えない仕様は無いけどやっぱりすごい混んでるな。

うん、並ぶけどね？

「ここのアイスが～凄く美味しいらしいんですよ～」

「そ、そなんだ」（小声）

なんて会話になるかギリギリレベルの会話をしてると、

「に、い、さ、ん？　…　何、してるんですか？」

お迎えが来た。

いや、普通にビビった。

な、なんで怒ってんの…？（畜生）

あ、噴水にいなかったから？
そうだよね？　だよね？
「え～なにこのこ～。おにーさんの知り合い～？」
「あ、あの、えっと・・・」
妹です。
そう言おうとしたのに。
「彼女です」
え、
「この人、サフラの彼女です」
めっちゃ顔赤くしてシキミちゃんが言い放った。
え、そうなの？
「え～そーなの～？」
「おにーさーん、彼女さんがいるのにだめじゃーん」
えー、僕がいけないの？（畜生）
あ、そっか僕がいけないのか・・・。
「ご、ごめんねシキミちゃん。噴水から離れちゃって」
「そっちじゃないです！」

あれ？　違う？

「どうしてアタシが居るのにこの人達に着いてきたんですか!?」

あーそっち？

たしかに知らない人について行ったらダメだもんね。

因みにその後――――

「ヒウンアイスを～４つ～。ポッピングシャワーで～」

そんなサーテ○ワンみたいな感じなんだ・・・（女に注文させるな）

――――アイスを食べさせたら機嫌良くなった。

あとボールホルダーは壊れた。

第15話　VS　名前からして芸術家

なんかひと騒動あったけどアイスを食べさせたら何とか治まってくれたシキミちゃん。

２人の女の子達と別れて今はポケモンセンターに戻ってジム戦の準備をしている。

「それでどうしたらいいと思う？」

そんな中僕は1人の男性から相談を受けていた。

なんでもこの人の所属する組織はポケモンをボールから解放することを目的に掲げて活動しているらしい。

なるほど。

つまりポケモンとトレーナーがもっと対等な関係になるってことだよね。

話を聞いた感じだとそうだと思う。

なんと素晴らしい組織なのだろうか。

その組織の会議で1人1人今後の活動に関する意見を出して欲しい、との事でアイデアが湧かなかったとの事。

「そうですね、まずは組織全体が一気に移動できる手段、例えば大きな船とかですかね？　あ、その船飛んだらかっこいいですね。

あとは…」

ゲームにもこんなすごい人がいればいいのにと思いながら僕は相談に乗った。

船の他にも幹部制度、基地や研究施設。結束力を高める為の掛け声とかを提案してみた。

・・・なんか今話した内容だと悪の組織みたいだな。

「ありがとよ、兄ちゃん。すげー助かったぜ。兄ちゃんさせ良ければウチに入って欲しいくらいだ」

「それは楽しそうですけど残念ながら今は厳しいですね。今はやらなくちゃいけないことがあるので・・・」

シキミちゃんとバッヂ集めて四天王にしなきゃだからね。

また今度詳しく説明するけど四天王になるにはバッヂも必要だからね。

「そうか、それは残念だな」

ホントにガッカリしてる。

そんなに入って欲しかったのかな？

「そんで兄ちゃん、恩人としてあんたの名前を聞いておきたいんだが・・・」

「こう言うのは名乗らない方がかっこいいんですよ」

というのもあるけど昨日の件でシキミちゃんが知らない人には個人情報を出さない方がいいと言われたからね。

妹に常識を教わるなよな・・・。

「なるほどな。確かにそうだ。それじゃ、俺はもう行くとするか。ホントに助かったぜ。ありがとな」

そう言って男性はどこかへ行ってしまった。

「兄さん、お待たせしました。もう大丈夫です」

男性と入れ替わるようにシキミちゃんが戻ってきた。

「ところでさっきの人って誰ですか？　珍しく兄さんが知らない人と話していたので・・・」

・・・うん。珍しく、ね・・・。

「さっきの人はたまたま会った全然知らない人だよ。相談されたからそれに乗ってただけ」

「そうなんですね。それじゃ、兄さん。行きましょうか」

「うん。わかった」

あ、あの人達の組織名聞くの忘れてたな。これじゃ入りようもないな。

それにしてもさっきの人の服装どっかで見たことある気がするなー。

薄い青のフードと白いエプロンみたいな服装。

そのエプロンに描かれた「P」に似た雷かなんかのイラスト。

うん、なんか見た事ある気がする。

・・・なんだっけ？

ま、いっか。ジム行こ

そんなこんなでジムに到着。

「『かえんほうしゃ』」

よし、次の街行こうか。

第16話　VS　たましいポケモン

――――その日は別になんてことない日だった。

私はいつも通りお友達のサンドと遊んでいた。

うん、サンドだよ？

普通サンドってこの辺りに居ないはずなんだけどどっかからか迷い込んできたみたい。

寂しいからってことでよく私と一緒にいるんだけどそのうち仲間が見つかるといいね。

あとこの子の黄緑色すごく綺麗だなっていつも思う。

時々出てくる星はよく分からないけど・・・。

で、この子と遊んでる時に人が来たの。

あんまりこの辺りに来ることなんて無いからちょっと珍しいな。

変なゴーグルを着けたランプラーを連れてたから一目でトレーナーだとわかった。

本能的に驚かしてみたくなってサンドと一緒に近づてみた。

――――その時だ、私が運命の出会いをしたのは。（倒置法）

改めてよく見てみると女の人と男の人の2人組みたい、なんだけど・・・。

なんだろ、この男の人。すごく魅力的。

顔とか見た目がどうこうじゃなくて、この人が放ってる雰囲気？が凄い。

死臭というかなんと言うか、ゴーストタイプに囲まれた生活をしてるのか、はたまたもうタヒんでるのか・・・。

いや、この人は幽霊でもゴーストタイプのポケモンでも無いけど・・・。

そう、例えるなら1度タヒを経験したかのような・・・。

なんて。

でもこの感じはゴーストタイプのポケモン達ならみんな好きだと思う。

なので私はその場を飛び出し、その人に飛びついた――――

砂嵐が吹き荒れている。

ここはヒウンシティとライモンシティの間を結ぶリゾートデザート。

移動が面倒な砂漠地帯だ。

四天王シキミちゃんの手持ちにデスカーンさんがいるからね、デスマスさんを捕まえに来たんだけどあの遺跡みたいな場所までが遠いのなんの。

あとずっと砂嵐が吹いているから・・・

「あ〟、目に砂入った」

「え！　大丈夫ですか、兄さん？」

「ラプラー？　ラプラー」

シキミちゃんとテラーちゃんには「ぼうじんゴーグル」を着けてもらってる。

砂嵐ダメージが入るからね。

うん、ゴーグル着きも可愛いね。

あ、僕の分も買えばよかったな・・・。

ふう、やっとの思いで到着。ここが古代の城ですか。

うわ～懐かしいな～。ここでデスマスさんの色違い粘ってたらサンドの色違いが出たんだよな～。デスマスさんより出現率低いはずなのにな～。おかしいな～。

・・・ま、今その話はいいか。

おお、原作通りちゃんと蟻地獄みたいなのがあるよ。

原作の忠実再現度（？）にいつも通り感動してたら、

「デス～。デスマ～ス」

なんか急に抱きつかれた。

ペシペシペシペシ

あとなんか匂いでも嗅いでるみたい。

え、なんか変な匂いでもする？

僕お年頃だから変な匂いがするかもしれないって方が気になってしまう。

「ねえ、シキミちゃん。僕ってなんか匂いする？」

「匂いです？」

シキミちゃんに聞いてみる。

別にテラーちゃんでも良かったんだけどあの子、鼻あるの？

なんて考えてる間にスンスンと嗅がれる。

ん、ちょっと擽ったいね。

ペシペシペシペシ

「いえ、いつも通りいい匂いですけど？」

「そう？　ならいっか」

そうかいつも通りか・・・。

じゃあなんでって、え？　いい匂いすんの？　シャンプーかなんか

かな？

スンスンスンスン

あ、あともう嗅がなくていいよ？　擽ったいし、なんかずっとスンスンされると恥ずかしいというか・・・。

何とかシキミちゃんに離れてもらった。

あ、あとテラーちゃんも叩くのやめてもらった。今回僕なんも悪くないよね。

うん、ありがと。今はこのデスマスさんだからね。

未だずっとくっ付いてる。

あ、なんか今のうちに捕まえられるんじゃない？

バトルしなくて済む友情ゲットみたいでいいよね。

よし、試しにやってみるか。

「ねえシキミちゃん。この子捕まえてみてくれない？」

「はい、やってみます！」

少し意気込んでる様子のシキミちゃん。

とは逆にあっさりと捕まってくれたデスマスさん。

…よし、ゲットだぜ。

とりあえずご挨拶の為にシキミちゃんがボールから出してみる。

「出てきてください」

「デスマース」

すると主を理解したかのようにその人の元へと向かった。

懐がガラ空きだった僕の元へ。

いや、だから僕じゃないって…。

君のご主人様はシキミちゃんだよ？

わかる？

「デースマース」

うん、相変わらずギューってしてるね。

なんだろ、僕も1度死んだ身（？）、ゴーストタイプみたいなもんだろうから親近感でも湧いてるのかな？

とりあえずよろしくってことでこの子のことを図鑑で確認してもらう。

あ、そうなんだ。この子メスなんだね。

うん、原作再現出来てるね。

「「・・・」」

・・・え、なに2人とも。なんか怖いよ？

うん、まあいいか。

そんな訳でこれから君は四天王の手持ちとして頑張るんだよ？

まあこれからシキミちゃんをよろしくね。

「デスマース」

相変わらず僕にギューってしてるけど・・・。

じゃあシキミちゃんが主ってことだけでも覚えておいてね。

・・・あ、さっきからこっち見てたサンドが決意を決めたかのような瞳でどっか行っちゃった。

星とか黄緑色とか見えた気がしたけど気のせいだ。あーあーあーあー。うん、気のせい。

よし、此処での目的も達成できたしそろそろ行こうか。

だがしかしもう辺りはすっかり夜。

まじで、

移動が、

大変。

ああもう！

やっとの思いでライモンシティ前まで来たんだけど、

「ここになにか施設でも建てればいいのに・・・」

「確かに砂漠の移動は大変ですもんね」

よし、シキミちゃんの追撃も相まってフラグになったんじゃないかな？

・・・？　そりゃね、僕はＢＷ２もプレイしてるんだよ？　内容くらい頭に入ってるさ。

忘れてる事なんてないよ。

うん、無いったら無い。

第17話　ＶＳ　黒でも金でも人気のモデル

様々な施設が建ち並び、ヒウンシティとはまた違った賑わいを見せる此処、ライモンシティ。

その街の一角、名物の観覧車をメインとした遊園地がある。

原作にもなかった色々楽しそうなアトラクションが増えてたりしたけど今はジムの……　あれは、なんて名前なんだ？

ジェットコースターでは無さそうだし…。

リニアコースター？　なんて言葉ある？

ん、なんだろ…。

まあ名前はいいか、みんなもう分かるでしょ？

あのちょっと楽しかったジムで僕は、

「ようこそ、挑戦者さん……　って大丈夫かしら？」

「うーわ。けっこうきっつー…」

「に、兄さん大丈夫ですか!?」

「ラプ、ラプラー!?」

「シャーラ…」

酔った。めっちゃ酔った。

あの上下左右にグワングワン揺れるコースターめ…！　もう勘弁葬りたい。

うわー、すげークラクラするよ。

これからカミツレさんのポケモンにクラクラさせられるってのに…。

「何でこんなジムにしたんですか!?」

少し休憩したら落ち着いたみたい…。

うん、もう大丈夫。大丈夫だからそんな怒らないでよ、シキミちゃん。

別にこのジムは悪くないでしょ…。

それにこんなは酷いよ？

「ご、ごめんなさい…。すぐには無理だけれども何年かの内に変えておくわ」

アンタもなんか低姿勢だな。

と思ったら結構酔う人がいたらしく、ジムの内装変更を余儀なくされてたらしい。

あ、でも変えるって言うなら…

「じゃあ、変えるならランウェイみたいなイメージでお願いします」

原作を作り込んでやる。

僕はジムに関してはＢＷ２の方が好きなんだよね。

・・・楽だから。

てものあるけど、普通に楽しいじゃん。あの演出。

結構好き。

「あら、いいじゃない」

お、やっぱり高評価みたいだね。

「あ、それじゃあ他にも・・・」

他にもＢＷ２の方のジムについて色々教えてあげた。

今のジムはアトラクションとしてそのままに。

新しい方ではお客さんも入れるようにする。

とか色々覚えてる範囲で教えた。

うん、喜んでくれて何よりだよ。あ、お礼ならどこかの株式会社の取締役さんに言ってね？

ただ途中で、

「あなた凄くいいわね。どう？　このジムで働いてみない？」

なんて冗談を言われたけど(なんか後ろのシキミちゃんが怖かったから)、断っておいた。

だ、大丈夫だよ、シキミちゃん。とりあえず四天王にするまでの役割は全うするからね?

だからそんなに怒らないで?

なんかやけに勧誘されるな・・・。これが記憶チートなのか?

なんて厨二病を発作しながらも新しいジムのアイデアも伝えきったから今日はもう帰ろうか。

あ、あとカミツレさんには挑戦者が酔ってないか、フラフラしないかどうか確認を取るようしたらどうかと提案しておいた。

僕みたいな人がもう出なきゃいいけど・・・。

カミツレさんにお別れして外に出てみると少し日が傾いた頃。

でもポケモンセンターに行くにはまだ少し早いくらい。

・・・ 折角だしここで遊んでいこうか。

シキミちゃんも遊びたそうにしてたからね。

いや僕が遊びたいわけじゃないよ? シキミちゃんが、遊びそうにしてたからだよ?

か、勘違いしないでよね!?

そんなこんなで行ってみようか、

絶叫抜きで。

…って言っても殆ど絶叫系又は僕が苦手そうなものばかりだった。

嫌われてるのかな？

とりあえずアトラクション楽しんでるシキミちゃんだけ眺めておいた。

うん、なんか親になった気分だよ。

他にもトランポリンみたいなやつとか屋台とか見たけど、

最後は勿論観覧車。

うわお、ミナモシティじゃないけど沈む夕日がすごく綺麗。

…てかシキミちゃん？　なんか近くない？

高いところ怖かったっけ？

あとなんか顔赤くない？　夕日に染ってるだけ？

そんなこんなですっかり遊園地を堪能した僕達はポケモンセンターで一部屋借りた。

今日も楽しかったね。

遊園地にも行けたし、シキミちゃんも楽しそうだったからね。

うん、満足満足。

さ、寝ようか。

というところでようやく、

「あ、ジム挑戦すんの忘れてた」

本来の目的を思い出した。

翌日やっぱり余裕でバッジ取れました。

ん？　戦闘シーン？　そんなものうちにはないよ。

第１８話　ＶＳ　ふゆうポケモン

皆アニメのポケモンって見たことある？

そこでコジロウが自分のポケモンをボールから出すとどうなるかわかる？

うん、相手に向かわず自分に向かってくるんだよね。

抱き着いたり、噛みついたり、からませたり。

僕もうろ覚えだからこんなしかわかんないし、間違ってたらごめんだわ。

あ、なんで今その話を出したかというとね、

「プル～♪」

「放してください！　兄さんを引きずり込もうとしないで下さい！

…　兄さん今助けますからね！」

「ラプラ…」

うん、絶賛そんな状況…。

プルリル

ベールの　ような　てあしで　エモノ（意味深）を　だきかかえ

８０００メートルの　しんかいへと　ひきずりこむ。（出典ソード図鑑より）

経緯を説明しようか。

ライモンシティを満喫した後５番道路を抜けて橋を渡り、ホドモエシティに着いた。

懐かしき冷凍コンテナ、何年後かにはＰＷＴになるんですよ。

確かここにはプルリルさんが出てくるはずだから捕まえようとなり、釣竿をレンタルした。

今日は釣りデートかいなんて茶化されたけどもういつもの事化してきてるのでスキップ。

釣竿をレンタルして釣れるスポットを探して糸を垂らしてみる。

すると物の数秒で、

「わ！　掛かりました！」

すごい引いてる。これは大物かな？

シキミちゃんが頑張って釣り上げると、

「釣れ、ました・・・　！　あ！」

大きな真珠だった。

凄いな。まだ引いてるよ。・・・　あ！

「兄さん！　見てください、おっきな真珠です！　って兄さん!?」

す、凄いな・・・。まだ引くのか。

あ、ここで問題。僕今どんな状況だと思う？

「に、兄さん!?　何で落ちてるんですか!?」

答えは水に落ちたでした～。・・・　子供じゃないんだから自分で落ちたわけじゃないよ？

ほらちゃんと、

「プル～♪」

「え!?　プルリルですか!?」

そう、実はここに来てシキミちゃんが釣りを始める前からずっとこう足を引っ張られてたんだよね。

うん、たった今負けて落ちちゃったけど・・・。

何で助けを呼ばなかったのか？

え、だってシキミちゃんなんか忙しそうだし、テラーちゃんもシャンデラさんも釣り楽しそうに見てたんだもん。

邪魔しちゃ悪いじゃん？

それに自分で脱せると思ったんだけどね。思ったより向こうが強かったよ。

そんなわけで冒頭に戻る。

まだ浅瀬だから大丈夫なんだけど・・・。

うへ～。ピンクの触手が絡んできてなんか触手プレイみたいになってるよ～。男にやって何の需要があるんだよ～。

絶対に離さないという鋼の精神を感じた。

水タイプなのに・・・。

いい心構えだね。シキミちゃんの手持ちにほしいくらいだよ（危機感知能力：弱）。

ん～。でもやっぱり助けてほしいかも。

「シキミちゃーん、ごめんやっぱ助けてー？」

「・・・・・・」

ええ～。ここに来て見殺し～？

・・・じゃなかった。

え、何で頬染めて息荒いの？　この触手プレイ見て興奮してるの？

死の淵に立たされる所見ると興奮する極度のリョナ？

「兄さんと触手・・・。わ、悪くないかも・・・／／／」

ええ～。本気～？

シキミちゃん、薄い本も描けるのかよ～・・・。

後でいくらでも見せてあげるから（!?）今は助けてほしいなー。

「……／／／」

無理っぽ～い。

なーんてふざけてる間にもどんどん引きずり込まれていく。

あー…。そろそろまずいかも。もう肩の高さまで沈まされてるよ。

うん、これ以上は生命の危機だからね。まーた危機管理が足りないとか言われちゃうよ。

少し危ないかもけどテラーちゃんに助けてもらおう。

もしかしたら某Ｂダ○シュみたいに海で息できるかもしれないけど、今やるべきことじゃないよね。ミスったらちょっと洒落になんないし…。

…　しょうがない。テラー、頼んだよ。

「テラー、弱めに『シャドーボール』」

待ってましたと言わんばかりに、

「ラ、プ！」

ちょ、強すぎん？

ちっちゃいシャドボが迫ってきた！

ふう、サッパリした。

冷えた体を暖め、汚れを落としお風呂から上がった。

ポケモンセンターはホントに便利だね。

あ、あの後？

あの時のシャドボは言ってしまえば僕に当たらなかった。

あ、いやね？　残念ながらテラーちゃんの命中率が凄かったからじゃなくてさっきのプルリルに守られたの。

うん、助けてもらった。

実際に技の「まもる」も使っていたし、触手を使って僕を庇ってくれた。

ま、その後も普通に引きずり込もうとしてたから未だ惚けてるシキミちゃんを放っておいてポケモンさん達に手伝ってもらった。

うん、やっぱり最初からこうしとけばよかったな。

あ、その後も普通に体に巻きついていたけどね。

な、なんだろね僕。どういう扱いなんだろ・・・。

あ、でもとりあえず、

「ありがとね、プルリル。テラーちゃんもシャンデラさんもデスマスさんもね」

…ん？　シャドボから守ってくれただけで元々はこの子のせいでシャドボを撃つ羽目になったんだよね？

あっぶねぇ!?　騙されるとこだったわ！

そうじゃん。この子が元凶なんじゃん。なんでその元凶にお礼なんか言ってんだ？

…ま、いっか。

なんか、

「プル～♪　プルル～」

嬉しそうだからいっか。

ギューッ

やっぱ良くねぇわ。非常に痛てぇー。

第19話　VS　トンネルおじさん

今日はホドモエシティのジムに挑戦しようか。

あ、あの後ね結局これも何かの御縁だということで、

「これからよろしくお願いしますね、プルリルさん」

「プルル～」

シキミちゃんの手持ちになってくれましたよ。

まあ、そのせいあってなのか、

「プル～♪」

うん、ずっと巻き付けられてる・・・。

まあいいや、そのまま行こ（!?）

ポケモンセンターからジムまで向かっていると何も無い斜面が目に入った。

「何も無いね」

「え？　ええ、何も無いです？」

おっと、シキミちゃんに変なやつと思われちゃうな（手遅れ）

わあ、まだトンネルができてないな～。なんて斜面を見てたら、

「おい、何してるんだ？」

ウェスタンジムリーダー、ヤーコンさんに話しかけられた。

確かの何もないところじっと見てたら怪しいことこの上ないよね。

「あ、ヤーコンさん。部外者からの提案なんですけど、もうこの辺にトンネル掘っちゃってヤーコントンネルってしませんか？」

「ほう・・・」

おや、適当に言ってみたにしてはなかなか食いついたな。自分の名前の入ったトンネルがいいのかな？

「街の奴らにも聞いてみるか」

わあ、ホントに本気らしい。

ジムも無事突破したので（唐突）ホドモエシティでショッピング。珍しくまともな人間らしいことしてますね。

ショッピングしてたらいつか見た事ある男性を見かけた。

「おお、あの時の兄ちゃんじゃねぇか」

「あ、ども」

Ｐの何とかさんだ。

うん、面倒だからとりあえずプラナリア団って呼ぼうか。

「いや～、あんときはホント助かったぜ。あんたの意見がめっちゃ気に入られてよ、おかげで俺も晴れて下っ端卒業だぜ」

「そうなんですか、よかったです」

うん、いいことをすることはいいもんだね。

昔（前世で）おばあちゃんに良いことをすればいつか自分にも回ってくるからね～なんて言われたからね。1日1善目標にしてるーよ。

「ああ、それで八賢人って幹部組織を作ろうかって話になったんだが…」

な、なんだろう嫌な予感がする。

それに八賢人、なんか聞いたことあるような…。

「兄ちゃん、あんたに入ってほしいんだが…」

む、まだこのプラナリア団の人諦めてなかったのか。それとも上司に勝手に気に入られちゃったのかな？

「いいえ。僕は陰から支えるだけでいいですよ。あんまり表立つのも得意ではないですし」

まだシキミちゃんを四天王にもできてないからね。遊ぶのはまだ先かな？

「だから僕を抜いて七賢人でどうですか？」

言って、気付いた。
お、思い出した・・・！
この人たちプラズマ団じゃん！　何がプラナリア団だよ！
え、じゃ、じゃあ僕この人たちに肩入れしたことになったのか・・・
!?
ま、まずくない？
アンケートとかで反社会勢力ではありませんてとこチェックできないじゃん。
「そうか・・・。残念だな」
「ははっ。す、すんません・・・」
因みにその後、僕が影なんて言ったからなのかダークトリニティてのも結束されたらしい。
・・・　すまん、主人公。あとは任せた。

第２０話　ＶＳ　えちえちぶっ飛びガール

逃げるようにホドモエシティを飛び出し電気石の洞穴を抜けた。

あーあ、これならコンテナ秘密基地にしたらどうですかとか言わなきゃ良かったなあ。

迷惑かけるぜ、主人公。

という事で久しぶりに戻ってきましたね。我が故郷、フキヨセシティ。

うん、相も変わらずに滑走路の近くに位置してやがりますね。

僕の家でもまあまあ飛行機の音とかするけどこの辺の人たちは大丈夫なんでしょうか？　耳ぶっ壊れそうですよね。

さてと久しぶりってことなんで一旦両親に会いに行きましょうか。

「あら、お帰りなさい。もう終わったの？」

お母さんが出迎えてくれた。

お久しぶりですね。

「いやいや、まだだよ。明日辺りにでもここのジムに挑戦する予定」

「あら、まだだったのね」

あー、うん。ここら辺の人たちからしたら変な回り方してるもんね・・・。

何度シキミちゃんに疑問符を打たれたことか。

まあいいやと一家全員でここまでの旅の話や捕まえたポケモン、あまり言わなくていいけど僕が迷子になったことも楽しくお話しした。

迷子の報告の時やっぱりかって反応されたよう・・・。

あ、タワーオブヘブンにも顔出したけどめっちゃ泣き着かれたよ。

・・・お、おう。

なんかこんなにもヒトモシに群がられると絶景というかなんというか・・・。

集合体恐怖症の人は見ちゃだめだね。

あれ？　なんか数増えた？

因みに帰ろうとしても泣き着かれたよ。

どうしろと・・・。

うん、まあこの日はそんな感じで楽しく過ごしゆっくり休んでからさあジム戦。

何の苦労もなくジムリーダーにまでたどり着いたんだけど、

あれ？　この子どっかで・・・

「・・・ってシキミちゃん!?　と、お兄さん!?」

「あ、フウロちゃん」

あ～、この子どっかで見たことあったと思ったらあの時遊びに来て

たシキミちゃんのお友達か。

お久しぶりです。

ジムリーダーになったんですね。

公式ではカミツレさんとの交流があるのは知ってたけどシキミちゃんともあったのか・・・。

オリジナル要素ですな。

そういえばあの時から面影があったような・・・。

赤い髪とか、ぶっ飛んでるとことか。

そんなジムリーダーことフウロちゃんから声をかかられた。

「あ、あの。お兄さんに謝りたいことがあって・・・」

謝りたい？　別に殴られたり、いじめられたり、車で事故起こされたりはしてないと思うけど・・・。なんかあったっけ？

「ごめんなさい、お兄さん。

・・・　私、あのときお兄さんと結婚するって言ったと思うんですけど、ジムリーダーとして仕事に専念したいので、お兄さんとは結婚できません！」

あ、そーなんだ。

僕としてはそのこと軽く忘れかけてたし（最低）、別に気にしなくていいんだけど・・・。

あれ？　僕なんかフラれたみたいになってない？

「ホントにごめんなさい！」

うん、だから気にしてないって。落ち込んでもないし、な、泣いてないって！

ほらそんな大声出すから周りのジムトレーナーさんたちから「あら…」って声と可哀想な人を見るような視線が…。

「私が言うのもなんですけど、お兄さんにはきっといい人がいると思うんです」

うんうんと頷くシキミちゃん。

あ、シキミちゃんにも慰められた…。

「なので私のことは忘れてください！」

や、やっぱりフラれたみたいになってるな…。

シキミちゃん、何ガッツポーズしてるの？

兄がフラれてそんなに面白いですか？

「あ、あの。私が言うのもなんですけどお兄さんさせよろしければ何人か紹介しましょうか？」

え？　いや…

「よろしくないです！」

シキミちゃんに拒否を強いられた。

え～・・・。まだ落ち込む兄を見たりないんですか～？

いや、話を受ける気はなかってけどね？

ホントだよ？

そんなこんなあったけど特にジム戦に関してはスムーズに攻略できた。

終始泣いてたけど・・・（泣いてないってば！）

第２１話　ＶＳ　俳優になっても安泰仮面

ネジ山を抜けるとき、やみのいしを探したけどなかったＺＥＩ。
こんなもんかと落ち込みながらもセッカシティに到着です。

うん、寒いね！

原作みたいにポケセンから出ただけで冬から一瞬で秋になるなんてこともないので今は寒ーいです。

防寒対策？　いつも抱き着いてくれるプルリルさんは寒いって引っ込んじゃったし、さっきからテラーちゃんを抱っこしてるんだけどあんまり暖かくない。
これ本物の炎じゃないからね。

しっかり防寒してからジムに挑戦。あそこ寒そうだもんね。

「おーっす！　未来のチャンピオン」

あ、ども。

「あの、ジムに挑戦したいんですけど・・・」

「おーっと、申し訳ない。今ハチクさんはちょうど出かけていて・・・」

「ああ、すまない。今戻った」

何やら忙しそうだ。

やっぱりジムリーダーも忙しそうだ。専念したくなるのもわかる。

…　何でもない。

「あ、あの。忙しそうですけど、なんかあったんですか？　ハチクマン」

「ん、ん？」

「ああ、いえ」

「あ、ああ。何でも、最近プラズマ団に入れ知恵した奴がいたらしくてな…」

なんと、そんなことをした人がいるのか。許せん、許せませんね？

「ホントそんな奴人間の屑ですよね」

「え、あ、ああ。そ、そうか…？　いや、そこまで言わなくても…」

うわあ、人間の屑って言ったらハチクさんに引かれたようー。

ふう、ようやくジムリーダーのとこまで到着。シンオウほどではないね、ここは。

…　シンオウはね、今やっても、めっちゃ時間かかるの。

着いたはいいけどね。

いや、めっちゃ転んだよ。

まあ、確かにスケートの経験とかこっちではないけど、ここまで下手だったとはさすがに思わなかったよ…。

膝とかぶつけまくったから。

・・・。

ほっら見ーてよ。こんなに腫れて・・・。うっわ、青あざになってるよ。いったーいなあ。

「わ！　だ、大丈夫ですか!?」

脚をめくってみてたらシキミちゃんに驚かれた。

「えー、っと。あんま大丈夫じゃないかも・・・」

見ると痛くなるよね、怪我とかって。見なきゃいいに。

ちょっと泣きそう。・・・　いや、泣かないけどね!?

「い、いたいのいたいのとんでけ～ってしましょうか!?」

いや、なんでさ。なんでだよ。僕は子供か？

「・・・・・　うん、お願い」

もちろんお願いしたさ。

特に痛みは引かなかったけどとりあえず可愛かったよ。

「どうしたんだ、その怪我は！」

その後、ハチクさんにキズぐすり塗ってもらって痛みが引いた。それ人間にも効果あるんすね。

あ、そういえばポケモンだいすきクラブあんじゃん、この街。

ジムリーダーを普通に倒してポケモンセンターで一息ついてる時にふと思い出した。

どういう感じかはあんま憶えてないけど確かポケモンとの仲良し度が見れた気がする。

「行ってみる？」

ちょっと気になったから聞いてみた。

「ラブ～♡」

うん、なんか聞かなくてもわかる気がするけど・・・。

ま、一応ね。

この子ったらシキミちゃんの手持ちが増えてから（元から異常な量あったけど）スキンシップが増えた気がするんすよ。

ジェラッてんのかね？　可愛い。

あ、シキミちゃんはどうする？

「兄さんのいくとこならどこでも行きます！」

・・・　誘拐されそう。

「とびっきり懐いてるなんてレベルじゃないわ！　あなたたち結婚でもしてるの!?」

あれ～？

テラーちゃんとの懐き度を見てもらったけどなんで結婚？　シンオウ神話かな？

え？　てかそんなに懐いてくれてんの？

「ええ、こんなに懐いたこを見たのは久しぶりね・・・。あなたたちからすごい絆を感じるわ」

いやはや、元から結構懐いてくれてんなとは思ってたけどまさかここまでとは・・・。

てか絆かー・・・。キズナねー？（布石）

逆にどうしたらそんなに懐くの!?とか聞かれたけど逆に聞きたいよ。

こうしてだいすきクラブを後にした。

うん、なんかすげー疲れた・・・。

も一回休憩したら次はゴビットさんを捕まえるためにリュウラセンの塔にでも行こうか。

あ、シキミちゃんの手持ちは普通に最高値だったよ。

第２２話　友共出会いを

ここはリュウラセンの塔。ゴビットさんを捕まえるために来たんだけど・・・。

「お！　お前はフキヨセシティのサフラか!?」

何か知らない人に声をかけられた。

どうしよ、シキミちゃんに貰った防犯ブザー鳴らした方良い？

てかなんで知ってんの？

同郷の人じゃないよね・・・。

「あ、あの僕はサフラだけど、なんでフキヨセシティってわかるの・・・？」

「ああ、フキヨセジムのジムリーダー、フウロちゃんに振られたって有名だからな」

・・・　おい、家に帰れないじゃないか。

「さあ、フキヨセシティのサフラ！　俺と勝負だ！」

え～、ちょっと待って？　今ショックがぶり返してきてるから～。

知らないおじさんが勝負を仕掛けてきた！

勝手に始めんで？

「行け、ドーブル！」

ドーブルか・・・。

懐かしいな。変な技覚えさせまくってたっけ？

「俺たちの合体技を受けてみろ！」

「合体技・・・？」

「そう！　これこそが『ねをはる』と『アクアリング』の合体技・・・！」

な、なんと!?

そんなこともできるのか・・・。すごい。なんか強そう（小並感）

「名付けて、『ねをはリング』だ！」

なまえだせぇ。

でも名前に反してその効果はすごそう・・・。

「さらにだ・・・！」

「え、まだあるの？」

「『ひかりのかべ』と『リフレクター』を同時に貼れる合体技・・・！」

マジで？　すご。実質「オーロラベール」じゃん

「その名も『ひかりフレクターのかべ』だ！」

またなんか絶妙にだせぇな。

…　うちの子すりぬけだけど。

ん？

てかこれで技４つじゃん。相手勝てなくね？

この先どうなるんだろ。

ちょっと面白ろうだから遊んでみようか。

「む、無理だ…。勝てない」

「兄さん!?」

あ、ごめんね？　シキミちゃん。今遊んでんの。

そんなふうに思ってると思いが通じたのか、

「あ、あの兄さんが勝てないなんて…」

ノリに乗ってくれた。さすいも。

「ははっ。そうだろう…」

こいつもノリノリだな。楽しそうでなによりだよ。

その後も、

「くっ・・・。ここまでか・・・」

って、ちょっとピンチ風な雰囲気を出して遊んでたら・・・。

「おいおい、もうへばっちまったのか？」

「!?」

誰か参加してきた。良いね、一緒に遊ぼ？

・・・ てか、

「そのしゃべり方まさか・・・」

「そう・・・！ おれだよ！」

全然知らない子だった。

いや、だれだよ。

友達（1話、後ろの席に座ってた方）だった。

遊びにも飽きたし、こいつとも話がしたいからとっととドーブルを放射で倒した。

「いや～、久しぶり？ 初めましてだな！」

「うん、久しぶり・・・？ だね」

うわーを。マジか。こんな所に前世の友達がいるとは思わなかっ

たな・・・。

てかやっぱりコイツもこっちに来てのか。よかった。

「お前はやっぱりランプラーが相棒なのか」

「ラブ」キュピーン　～♡

「しかも色違いじゃないか」

だからそれどうやってんの？

てか今ハート出てなかった？

「それでこの子は？　お前の彼女か？」

シキミちゃんを指さして聞いてくる。

指を指すな。

それと何人にも言われてるけど妹だ。

「残念ながら彼女じゃないよ、妹の『シキミ』ちゃん。・・・ほら、シキミちゃん挨拶して？」

「初めまして。兄さんの妹のシキミです」

「・・・ほう、『シキミ』ちゃんか」

ニヤッと笑った。

いや、お前にはやらんぞ？

「そうか！　宜しくなシキミちゃん。俺はコイツの昔からの友達、リンドウだ」

あ、コイツこっちだとリンドウって言うんだ。

「あ、そうなのですね。兄さんから昔からの友達が居るって聞いてたけどなかなか会わせてくれないから嘘なのかと思ってました」

し、失礼な・・・。ちゃんと居るからね。

・・・むう、コイツに会ったらなんかやりたいことが色々あった気がしたけど突然過ぎて忘れたな。

「えっと、これからゴビットさん捕まえに行くんだけど一緒に来る？」

とりあえずコイツにもシキミちゃん四天王にすんの手伝ってもらおうか。

バッヂ集めももう終わりそうだし、それからのことも考えなくちゃね。

「おう、俺も捕まえたいやつがいるからな。着いてくぜ」

そか

「俺も着いていくぜ？　フキヨセシティのサフラ」

いや、お前は帰れよ。

第２３話　ＶＳ　ゴーレムポケモン

「で、何で僕だってわかったの？」

ゴビットさんを探してる途中、気になってたから小声で聞いてみた。

何でコイツは初見で僕を僕だとわかったのか。

ま、まさかコイツもフキヨセの噂を聞いて・・・!?

「？　だってお前、前世と全然顔変わってないぞ？」

あ、そいやそうだった。

でもコイツは顔変わってる気がする。前世の顔はぼんやりとしか覚えてないけど・・・。

「それより、どうだ？　こっちでの俺の顔は。かっこいいだろ？」

「自分で言うなよ」

とは言ったものの実際かなり美形だと思う。

美形って言っても爽やかイケメンじゃなくてオラオラ系っての？

漢っぽくて頼りになりそうな感じ。

・・・　何気にシキミちゃんが惚れないか心配する程度にはかっこいい。

前世のコイツを知ってるからこそ、こんな奴にシキミちゃんは任せられない。

そう決意したところで、

「それはそうとお前、名前は？」

肝心なことを忘れてた。

あ、まだ名乗ってなかったか・・・。

改めての自己紹介を済まして今置かれてる状況を軽く話した。

「・・・ て訳だから、僕はシキミちゃんを四天王に育て上げるんだ。もしも邪魔するなら容赦はしない」

コイツのことだから、万が一を考えて釘を刺しておく。

むしろ手伝え。

「大丈夫だ、安心しろ。お前の野望の邪魔はしないさ。・・・ 俺を何だと思ってんだよ」

野望て・・・。

そういえばコイツはどんな状況なんだろ。

気になったので聞こうとしてたら、

「いてっ」

壁にぶつかっちった。

良くないね、考え事しながら歩くのは。気をつけよ。

「だ、大丈夫ですか!?　兄さん！」

そんな大きな声出さなくてもちょっと当たっただけだから・・・。

なんか最近シキミちゃん過保護ってか、なんてか、

「痛くないですか？　ケガしてませんか？　またいたいのいたいのとんでけ～ってしましょうか？」

だから子供かって。

やっぱりなんか年下に見られてない？　僕は君のお兄さんですぞ？

・・・　あと今はリンドウがいるからやめて？

僕にだって羞恥心はあるんだよ？

「・・・　お前、いつもこんな感じなのか？」

おっと、友達にそんなこと言われると傷つくな。

なので、

「そんなわけないだろ？」

見栄を張った。

「ええ、いつもこうですよ」

言わんで？

せっかく張った見栄が・・・。

「ああ、だろうな」

ばれてら～。

「・・・ お、おい。そんなことよりも」

そんなことってなんだよ。

「この壁、なんか動いてないか・・・ ？」

は？　何言ってんだコイツ。

「そんなベタな展開あるわけないだろ？」

「だ、だよな・・・。わりぃ。そんな訳ないｙ・・・」

「これはゴルーグだ」

「はぁ!?」

あれ、気付いてなかったの？　さっきから微妙に動いて、今もこうして腕を大きく振り上げて勢いよく振り下ろす・・・

「え、ちょっ。サフラ!?」

「兄さん!?」

と見せかけてその手に持ったお花をくれた。

「わあ、ありがとね」

見てー、お花くれたよ。天空の城ラ〇ュタみたいですね。

「紳士だ・・・」

かっこいい。

「女の子だそうです」

「淑女だ・・・」

かっこいい。

「怪我はないか？　フキヨセシティのサフラ」

お前まだいたの？

第２４話　ＶＳ　後ろの席の奴

「サフラ、お前はこれからどうするんだ？」

シキミちゃんが淑女なゴルーグさんを捕まえてから、皆でポケモンセンターで一休みしているとリンドウが訪ねてきた。

・・・シキミちゃん、リンドウの顔見えないから一旦降りて？

「最後のジム、ソウリュウジムに行くよ」

膝から降りてくれないからそのまま話した。

ソウリュウジムが最後なんて決まりは無いけど、僕は原作勢だ。地元勢（？）の人たちにはわからないあろうけどジム挑戦の正しい順路を歩みたくなるんだよ。

「ああ、やっぱりそうか」

ニヤッと笑う。

コイツはわかってくれるから嬉しいよ。

こういう時に話の分かる友達がいてよかったなって思う。

「それじゃ、俺が１つ良いことを教えておいてやろう」

良いこと？　なんだろ。ジャガさんに関することかな？

再びニヤッと笑う。あ、なんか変なこと考えてるな、コイツ。

「知らないのか？　じゃあ教えてやる」

無理やり繋げてきたな・・・。

「この俺様が（記憶チートがあるから）、（ほかに俺達以外で記憶持ち転生者がいなければ）世界で一番、（あくまで個人の主観で）強いってことなんだよ!!」

あーあ、せっかくの決め台詞が台無しだー。

てかただ戦いたかっただけかよ。素直にそう言えし。

「いくぜ俺のエース！　サザンドラ！」

「キャプテン！　フライゴン！」

「アイドル！　チルタリス！」

「リーダー！　バクガメス！」

「相棒！　ナッシー！」

お前のパーティーの肩書、無理矢理すぎじゃない？

「中心的存在！　クリムガン！」

最後だけ何とかしてあげて？

「お前の手持ちは1体だけだからな。この中の1体と勝負だ」

あー。そういう。
ん、まあ、丁度実力も知りたかったから丁度いいか。
「じゃあ、サザンドラで。対戦よろしくお願いします」
あえて天敵をセレクト。ウチのテラーちゃん、どこまで戦えるかな？

「なるほどな、それなら俺も1体だけにするか」
タイプ相性をものともしないテラーちゃんの猛攻であっさり勝利。
え、いや。縛りとかじゃないんだから自由にすればいいのに・・・。
僕は他の子も育てる自身が無いからテラーちゃんだけにしてるだけで・・・。
「いやな、さっきのお前を見て1体に集中した方が強いんじゃねって思ってな」
まあ、本人が言うならなんでもいいけど。
コスト削減。ヨシ！
テラーちゃんの性能について今後の教育方針にも繋がるかと思い説明しようとしたところ、
「おっと、ポケモンの詳細については3人が集合してからだ、それまではお互い秘密にしてようぜ」

との事。
にゃんでもいいけど。
「それじゃ、なんかあったら連絡しろよ」
「うん」
スマホにリンドウの名前が追加された。
「シキミちゃん、コイツのことよろしくな。目離すとすぐどっか行っちまうけど良い奴だからさ」
親目線やめろ。
「はい。もう離さないから大丈夫です！」
ヤンデレかよ。
前科があるから何も言えないけど・・・。
「・・・ それじゃ、僕達も行こっか」
「はい！」
まあ、どうせすぐ会えるんだろうからって事であっさり別れ僕達はソウリュウシティへと向かった。

第２５話　ＶＳ　ジムの仕掛け金かかってるおじさん

「お兄ちゃんたち凄い！おじーちゃんに勝っちゃうなんて！」

はい、戦闘シーンが一切ないまま最後のバッジもゲットいたしました。

ドラゴンタイプはみんな強そうだよね。

特に苦労しなかったのでわざわざ語るまでもないけどさ。

強いて言うなら、ドラゴンの首が動く度落っこちそうになって何度もゴルーグさんに支えられてたくらいかな。

ジムが終わった後、ガチ未来のチャンピオン様に声をかけられた。

何かと思ったらどうやったらそんなに強くなれるかとのこと。

え～、僕にそんなこと聞かないでよ～。

と、返答に困ったのでとりあえず、

「アイリスちゃんはトレーナーの才能があると思うよ」

適当に言っておく。

事実なんだろうけど変に手を加えない方がいいかもしれないからね。

え、シキミちゃん？　別に後悔はしてないけど今考えるとあまり手を加えなかった方がよかったのかもしれない・・・。
ま、過ぎたことはしょうがない（畜生）。この反省を生かしていこうね。

「ホント!?」

才能があると言われ喜ぶアイリスちゃん。僕みたいなよくわからん奴に言われて真面目に受け取るんかね？
子供って素直ね。

「うん、なんだったらチャンピオンになれたりして～。なんて」

ＢＷ２に出てくるアルティメットアイリスことチャンピオンアイリスの衣装と音楽は普通に好きだからね。
ぜひリアルで見てみたい。

それでシキミちゃんの良き同僚？　先輩？　上司？　になってね。

「うん！　あたし、チャンピオンになれるよう頑張る！　そしたらお兄ちゃんもお姉ちゃんも挑戦しに来てね？」

うん、シキミちゃんはお仲間になるんだしそんな戦わないと思うし、僕もチャンピオンに挑むような器じゃないからな～。

それにテラーちゃんソロで挑めるかな～。

サザンドラさんは存在自体がきついし、ボスゴドラ、アーケオス、ラプラスさん達も反撃されたらきついし、オノノノは・・・　違う間違った、オノノクスはどうせ襷龍舞でしょ。
タイプ面を危険視されなそうなポケモンも残念ながら６００族、増

してや何処かの先生がばちこり使っているから強さの証明には十分すぎるだろう。
どうせマンダは初手龍舞して流星群が強いんだ。
サザンドラに関してはリンドウの子と戦ったけどパンピーとチャンプでは強さは比じゃないだろう。
・・・何の話だっけ？
あ、アイリスちゃんの手持ちが強いって話か。
え？　違う？

「ドラゴンタイプ最強の技、あたしが教えてあげる！」
龍の里の人間はすごいな・・・。
人間技マシンみたいなことができるのか。
でも残念ながら僕のテラーちゃんもシキミちゃんの手持ちのポケモンたちも覚えることは無いけど、
「ラプ！　ラプラー！」
テラーちゃんが声を上げた。
え、覚えたい？　いや、君覚えないよ？
懐かしいな、天邪鬼オバヒシャンデラとか妄想してたよ。
テラーちゃん進化したらなんかのバグで特性天邪鬼になったりし

ない？　しないか。

逆に天邪鬼テラーちゃんとか僕が困るな。テラーちゃんに冷たくされたら泣いちゃうよ・・・。

アイリスちゃんに「りゅうせいぐん」を覚えれないことを説明し、あたし頑張るね、みたいなことを言われた。

とりあえず、頑張ってとは言っておいたけど多分もう会わない気がする。

仮に会うことがあるとしてもそれは僕じゃなくてシキミちゃんでしょ。

なのでシキミちゃんには、

「何となくあの子、ホントにチャンピオンになりそうな気がするから、その時は仲良くね」

って言っておいた。

こんな言葉信じるに値しないだろうけど、

「はい！　なんだか兄さんの言うことはよく当たるので今回もきっとそうだと思います」

何でも言うこと信じてくれるシキミちゃんが優しい。

そのうち悪い人に騙されそう・・・。

そんなこんなあったけど旅も終わったから家に帰るよ。

そこまで久しぶりってわけではないけど、ようやく1息つけるって感じかな。

ずっとポケセン生活だったからね。

落ち着いたらいよいよシキミちゃんの四天王就任に向かって最終調整していこうか。

・・・やっぱりなんか作ってる感が凄いな。

マッドサイエンティストみたいになってきた・・・。

第２６話　四天王に就任しま・・・・・

四天王になるには、

地方バッジはあたりまえ。
リーグ本部に申し出て審査が通ったらいろいろな試験を受ける。
三次審査まで受かった人がようやく現役の四天王とご対面。
相手四天王は今季の成績が悪かった人など本部で決めているらしい・・・。
大会同様３本セットの２本先取の試合ですべてが決まる。
当然のようにタイプ統一パでね。
対戦相手の現役四天王と同じタイプでもいいし、違ってもいい。
ほかの３人の既存のタイプはＮＧだそう。
色々あるみたい、大変そうだよね・・・。

でも――――

「え、え・・・ うそ。私が、この私がこんな小娘に・・・ ！」

――――シキミちゃんはそれを１０歳で突破した。

もちろん最年少記録らしい。

ふっ・・・。流石僕自慢の妹。兄としても鼻が高いです。

え、兄貴面すんな？

いや、兄貴なんだよぅ。

あの旅から3ヶ月くらい経った。

その3ヶ月間、シキミちゃんは勉強やら試験やら何やらで色々忙しかったらしいけど、僕はいつも通り鐘を鳴らすだけだった。

何だろう、このダメな兄貴感は・・・。

え、元から？

さすがに泣くぞ？

そんな訳で後半は手伝ったよ。

お茶入れたり、肩揉んだり。

集中力が切れました～。って言ってくるシキミちゃん（と序にテラーちゃん）をギュッてしたり。

まあ、そんなこんなあったけど省略。

いつも通りテラーちゃんとシキミちゃんとその手持ちさん達とグダグダ、イチャイチャしてただけだからね。

さてと、そんな僕だけど久しぶりに兄らしい事でもしようか。

「四天王就任おめでと。これ僕からお祝いの・・・」

そう言って取り出したのは何処か見覚えのある四天王シキミの服装。

・・・　これ、探すのめっちゃ大変だったよ。

「ありがとうございます！　アタシこれ一生大事に着続けますね！」

そんなことしたからあんなお胸の強調された衣装みたいになってたのか・・・！

また買ってあげるから成長に合わせていこうね。

四天王の業務っても色々あるもので、基本的に挑戦者に勝つこと。

リーグ側もさすがに休みが欲しいのか挑戦者の受け入れ期間があるらしい。

よしその休みの間に旅行しようか。

受け入れ期間は1月～2月、4月～5月、7月～8月、10月～11月となっていて残りは休み。当然お盆休みや、正月休みもある。

ええ・・・。

見方によっては年中無休の家よりいいじゃん。僕もこっちにすればよかった。

当然のように稼ぎも断然四天王が上だ。

挑戦者が来ない時は事務員みたいな仕事をするらしい。

え、やっぱやだ。

あと、災害時などによる緊急的な仕事もあるらしい。

まずないと思いけど、現チャンピオンロードが土砂崩れかなんかで閉鎖したらまず四天王が出動するらしい。

まあ、まず無いと思うけどね。

あと、四天王もずっとあの部屋にいるわけでなくちゃんと個別に控え室みたいのがある。

内線とか冷蔵庫とかテレビ、エアコンなんかは標準装備。
基本的にここで生活するらしい。
寮みたいな感じか・・・。

ご飯は自分で作ることも、給料から引き落としで注文することも出来る。

細かいことを言えばもっとあるけどパンピーの僕にはこのくらいで十分だよ。

「じゃ、僕はもう行くけどこれから頑張ってね」

お引越しの手配やら引き継ぎ式なんかも終わったので保護者役として来てた僕の役割もおしまい。

コレからはシキミちゃんの四天王ライフが始まるからね。
あーあ。仕方無いとはいえ寂しくなりそうだね。

・・・テラー？　なんでちょっと嬉しそうなの？

うん、まあ、僕はこれで帰りますね。

妹の健闘を祈りながら帰ろうとしたら、シキミちゃんに呼び止められた。

「え？　兄さんもここで仕事ですよ？」

「え？」

「え？」

おっと、アンジ○ッシュしちまってんな。

なんの仕事かわかんないけど僕は今、家の家業を継いでお仕事してるんだぞ？

「いえ、今日から兄さんにはアタシの補佐員としてここで働いてもらいます」

四天王は必要ならば補佐員を雇うことが出来る。そういえばそんなことも言ったね。

・・・ でも妹に養われてるみたいでなんかヤダな・・・。

「聞いてないんだけど・・・ ？」

「言ってないですもん」

言えし。

僕だって前世では「ホウレンソウ」をしっかりしろってよく怒られてたよ。

兄妹似たもの同士ですね。

「だって言ったら兄さん嫌だーって逃げてしまうでしょう？」

さすいも。僕のことよくわかってるね。

「ぱ、パパとママに言わなきゃ」

・・・ その隙に逃げよう。
僕、責任が伴うって言葉すごく嫌いなんだよね（最低）。

「もうおふたりには言ってあります」

そう言って携帯の会話履歴を見せてくれた。
『コッチの仕事は俺たちに任せてお前はシキミを頼んだぞ』
だってさ。
なんでお前さんも僕になんの相談も無しに・・・。

ふふん、とまだ小さい胸を張るシキミちゃん。

さすいも。
用意周到ですね。
感服感服。

「さ、諦めてくだい。コレからはここで働いてもらいますよ？　アタシの・・・ いえ、シキミの兄さんとして！」

お前がタイトル回収するんかい。

・・・ まあ、金の入り良さそうだしいっか（チョロい）

こうして転生者サフラ君は四天王の補助員として元気に過ごしていくのでした。
めでたしめでたし――――

シキ「たった３０話程度で終われると思ったら大間違いです！」
サフ「え？」
作者「え？」
・・・って事なんでまだ続くらしいです。
まだ描きたいことがあるのでノソノソ続けますね♡

第27話　ポケリフレ結構好き

「うん、みんなお疲れ様。今日もよく頑張ったね」

四天王補助員控室、僕達補助員にも割り振られた部屋がある。

僕は基本的に指示があるまでここでテラーちゃんとのんびりイチャイチャしたり、他の補助員さん達と談笑したりしてる。

そ。コミュ障だけど頑張ってんだよ。ご近所付き合いは大切だからね。

そんな感じで今日もいつも通り部屋でテラーちゃんと戯れてたら、お仕事を終えたシキミちゃんとその手持ち達がやって来たので労いの言葉をかけていた。

午前はシキミちゃんとポケリフレしてるこの子達だけど、午後、その日の分の挑戦者がいなくなったらこうやってみんなで僕の部屋に押しかけて遊びに来てくれる。

そんな訳で折角だからこの子達にリフレすることにした。

…　普通はそのトレーナさんがするもんだけど僕がやっても特に問題なかったのでたこうやって僕がすることもある。

別にシキミちゃんとやることは変わらんだろうに、なぜ僕に頼むのかね。

寧ろシキミちゃんの方がうまい。トレーナーの強さはバトルの強さだけじゃないからね。

実際僕もこの前撫でてもらった。うん、なんか、良かったよ。

っと、こんな話は今はどうでもいいんだ。
今はこの子達にリフレしなきゃね。

早速やっていこうか。

「おいで？　デスカーンさん」

まず1匹目はデスカーンさん。
捕まえたときはデスマスだったけど、すっかり進化して立派な棺さんへとなりましたよ。

そんな棺を撫でていく。

う～ん、何とも言えないこの感触が癖になる・・・。
スベスベしててどこかヒンヤリしてる。
たまに背中がゾクゾクする感じ。
・・・なんか良い。

そのまま頭、背中（？）も撫でて行き、

「うわっ」

「あ・・・」

決まって昂ったところで棺に閉じ込められる。

最初はビックリしてマジで５６されるのかと思ったけど、普通に考えて「この中も撫でて」ってことだろうと解釈した。
・・・今でもたまに５６されるって思うことは無い。
うん、ホントホント。

後々判明したことだけど、シキミちゃんは棺に閉じ込められたことがないらしい。
…　な、なんなんでしょうね。

棺の中も撫で続け、密閉空間による酸欠で目の前がくらくらしてきたところで開放してもらえる。

ふう、今日もちょっと危なかった（狂気）。

最後にポフィンみたいなやつを上げて終わり。

「はいこれ。明日も頑張ってね」

ニコニコ喜んで満足してもらえてるみたいだから僕も嬉しいよ。

そんな感じでデスカーンのリフレは終わる。

因みにこの間テラーちゃんは時々羨ましそうな顔をしながらも、
「最後には私の所に来るからいいもん！」
と、言わんばかりの顔で正妻の余裕を見せている。
可愛い。

…　いつも2人の時の甘えっぷりは何処へやら。

ま、いっか。実際最後には（さっきまで四六時中べったりだったけど）テラーちゃんとこ行くからね。

…　いや、浮気野郎のセリフじゃないよ。
ハーレムでもない。

一夫多妻とか言うな。
僕は純愛厨だ。

じゃあ、２匹目。

「ほらおいで、ブルンゲ…」

「あ…」

はい、飲み込まれた。

この子、プルリル時代からそうだったけど、いまでもこうやって巻き付いてくる癖が抜けていない。

そんなわけでいつもこの子の番が来ると捕食すると言わんばかりの勢いで巻き付いてくるんだよ。

そして今も僕が倒れているのお構え無しにひたすらグルングルン触手を絡ませてくる。

もう慣れたからいいけどさ（狂気）。

そんな状態からも何とか頑張って撫でる。
これじゃあ撫でてるのか抵抗してるのかよくわからない構図だけど一応撫でてるつもりだよ。本人（？）も気持ちよさようだし。

そのあと何度も攻防（？）を繰り返し、リフレ終了。

ふう、今日もちょっと危なかった（狂気）。

最後にポフィンみたいなやつを上げて終わり。

「はいあげる。明日も頑張ってね」

ニコニコ喜んで満足してもらえてるみたいだから僕も嬉しいよ。

そんな感じでブルンゲルのリフレは終わる。

因みにその間シキミちゃんは、

「は、捗ります～！」

とか何とか言ってメモ取って写真撮ってるみたいだけど、あまり深く考えないようにしよう。

あんまり僕が嫌がることするともう一緒に寝ませんよ？

はい、次。もうなんか疲れてきたけど、これが僕の仕事なところあるからしっかりやってこーね。

「ゴルーグさーん。おいでー」

そう言うとズシンズシン重量感ある歩きで、レディに重いとか言っちゃ失礼だね、僕の前までやって来た。

僕の前まで来ると片膝付いて、身を屈める。

うん、毎回思うけどさ、王の謁見じゃないんだからわざわざそんな態度無くていいんだよ。

その体制のまま片手を伸ばしてくるからそこに乗る。

するとゆっくり持ち上げ僕を肩まで運んでくれる。

戸愚○兄弟みたいになる。

わざわざここまで運んでくれなくてもいいのに肩に乗せるのがお気に召したらしい。

その為休日なんかは暇なときにゴルーグさんの肩に僕とシキミちゃんを乗せてのお散歩がブームらしい。

まあ、その度に見回りの人に注意されるけど・・・。

肩に乗ったままゴルーグさんの頭を撫でる。

表情筋が硬いからよくわかんないけど、何となく喜んでくれてるんだなってのが伝わってくる。

比較的安全にリフレが終わる。

最後にポフィンみたいなやつを上げて終わり。

「今日はこの味ね。明日も頑張ってね」

表情読めないけど喜んで満足してもらえてるみたいだから僕も嬉しいよ。

そんな感じでゴルーグのリフレも終わる。

はい、つぎ～。シキミちゃんのエース。

「シャンデラさん、おいで～」

そう呼ぶとすぐにやってくる。

空かさず撫でる。

この子は前の3匹と比べると特出したことは特にないから安全に終われる。

唯一あるとしたらテラーちゃんが進化したらこうなるのかって思い灘ら撫で・・・ いてっ。

あ、すんません。

シャンデラさんにぶたれちゃった。

そりゃそうだよね、ポケモンを撫でてる時に他の子のこと考えたら失礼だよね。

しかも女の子ときたもんだ。

ごめんなさい。僕まだ女の子の扱いには慣れていなくて・・・。配慮が足りませんでしたね。

反省。

そのまま色々撫でまわし、ご機嫌になってくれたので、最後にポフィンみたいなやつを上げて終わり。

「はい、お食べ。明日も頑張ってね」

あまり気にしないようにしてたけどシャンデラさん達のお口ってどうなってんだろうね。

そんな感じでシャンデラのリフレは終わる。

さてと、じゃあ、最後の子行こうか。

「おいで、２人とも」

基、最後の子たち。

今まではこの２人も別々にやってたんだけど、どっちの方が何秒多かっただの何だの言ってくるので一緒に撫でることにした。

今思えば最初の方からこの２人は張り合ってるみたいだけど何か競ってんのかね。

そんな訳で僕が椅子に座り、２人が僕の膝の上に座る体制になる。

因みにここで重いとか思ったり顔に出ないようにするのがポイント。

最近では慣れたもんで平然とした顔で撫で始める。

撫で始めるとさっきまでワチャワチャしてた２人もうっとり落ち着いた顔になる。

そのまま何事もなく撫で続け最後にポンポンと軽く頭をたたいて終わりの合図。

「シキミちゃんも今日１日お疲れ様。毎日頑張れて偉いよー」

「はい、ありがとうございます！」

未だ撫でてほしような目で見られるけど、ごめん、もう疲れた。

その後はいつも通り僕も部屋でご飯食べて、僕の部屋のお風呂に入って、僕の部屋で寝る。この間、シキミちゃんとずっと一緒で未だに一緒にお風呂に入ってる。

…シキミちゃん？　何度も言いますがあなたの部屋の方が内装豪華だし、お部屋も何倍も広いんですよ？

この前未使用のお風呂場見たけどジャグジーが付いてたんよ。ちなこっちは一般お風呂。

ベッドはキングサイズだったし。ちなこっちはシングル。

…もうそっち移動する？

そんな感じで夜は更けていく。

パッパ、マッマ。僕達は今んとこ大丈夫そうです。

第２８話　僕も負けるのは好きじゃないけど

四天王就任から早１ヶ月が過ぎた。

四天王の間まで来れた挑戦者さん達も割と結構（？）いるみたいだけど、シキミちゃん然り他の四天王さん方に圧倒されてここ１ヶ月では誰一人負けの記録を残していない。

まあ、原作主人公が別格だけだっただけで普通はこんなもんだよなと、一安心していた。

…　まさかこれがフラグとなるとも知らずに。

平和に挑戦者さん達に勝ち続け順調に四天王としての仕事が板についてきたある日、
ついにあの方がお見えしてしまった。

「…　初めて、負けてしまいました」

あらら、それはそれは。

順調に四天王としての仕事を全うしていたある日、ほかの挑戦者さんが居ないという事で早上がりしてきたシキミちゃん。

今まで負けなしだった分、今回負けてしまったのが相当悔しいのかすっかり凹んでしまったシキミちゃん。

「もう無理です…。頑張れないです」

シキミちゃんが病んでしまった。

僕も前世ではよくなってたよ。

お陰で指の付け根が常に歯型が・・・・・・ いや、何でもない。

そんな事より今はシキミちゃんだよ。

負けると不機嫌になる子供みたいに落ち込んじゃって、メンタルよわよわシキミちゃんになっちゃってる。

「やっぱりアタシみたいな子供になんて四天王は務まらないんですよ」

「じゃあ、もう辞める？」

「・・・」

「それにさ？　そんなこと言ったら先代の四天王さんに失礼だよ？」

名前は忘れちゃったけど・・・。

「うぅ・・・」

あと一押しでなんか行けそうだから、

「僕、四天王のシキミちゃんすごく好きだよ」

「！」

敢えて耳元で囁いてあげる。

効果抜群なのかむくッと勢いよく起き上がった。
ふ、チョロいな。
・・・ 僕が言えたことじゃないけど。

「兄さんアタシちょっと特訓してきます夕方には戻ると思いますので！」

「えあうんがんばって？」

効果ありすぎたかな？

「はい、行ってきます」

バーっと走って出て行ってしまうシキミちゃん。

ぺしぺシ叩いてくるテラー。

そんなテラーを撫でる僕。

・・・ うん。まあ、元気になったようでよかったよ

夜ご飯を食べながら気になったことを聞いてみた。

「あ、そう言えばさ、今回負けたのってどんな子だったの？」

「えっと・・・。確か終わったあとに見た資料だとレッドと言う名前の方だったんですけど・・・」

・・・え。もう原作進んでんの？
てかレッド様ここまで力試しに来なくても・・・。
少し不味いな・・・。リンドウに連絡しとくか。

しばらくすると、
『おう！　俺も丁度探し『者』を見つけれたからそろそろそっち向かうわ！』
って返事が来た。いや、別に一々こっち戻ってこなくていいけど。・・・なんかあんのかな？
ま、なんかあるんだけどさ

第２９話　４人揃って、四天王！

ブー、とスマホの通知音。だらけていた体を起こし、スマホを手に取る。

『いまどこ？』

「仕事場」

『空港来て』

「無理」

『５分だけでいいからさ』

「今日はまじ無理」

どうして５分間のためだけに空港に行かなきゃ行けないんだ。

『りょーかい、じゃオレが行くからちょっと待ってろ』

「どこに？」

と送ったは良いがなかなか既読がつかない。

今のは前世からの友人、リンドウとのラ〇ン（メール）の一部なのだが僕の質問から１０分間返信どころか既読もついてない。

僕達が今いるこの部屋、四天王とその補佐に与えられた部屋にやってくるのであれば挑戦者用の入口とは違う関係者用の入口があるのだが……。

流石にアイツでもそんなに馬鹿ではから、何となく察して係の人に聞くなりす

ピンポーン

と、機械音の後

『シキミさん、挑戦者がいらっしゃいました。用意をお願い致します』

と、部屋内に音声が流れる。

へぇ、今日も挑戦者の人来るんだー。

……。いや。

「あ、挑戦者の方ですね。行ってきます！」

「ちょ、ちょっと待ってねシキミちゃん。それ多分僕の友達だわ」

思ったより馬鹿なのかもしれない。

ガッツポーズでやる気満々なシキミちゃんを一旦呼び止め慌ててメールする。

「態々四天王の部屋から行かなくても控え室の入口別にあるから！」

「あ、そうなん？　わりぃ」

友人からの返事はやけに近く、もっと良くいえばこの部屋から四天王の間に繋がる扉から聞こえた気がした。

「まずはカントーから探すぞ。ほら、準備しろ」

「何しに来たんだよ、ほんとに」

ようやくリンドウが四天王の控え室。その部屋の玄関で僕は友人との出会って間もない別れに直面していた。

なんでもこいつ、僕が今日も今日とてお仕事に励んで……

うん、励んでるよ？　どんな楽な形になったとはいえ仕事は仕事だ。前世からそれは変わらん。

仕事に励んでいると知っておきながら全地方回ってくるとか言うロマン溢れる旅に出る！　と無責任に言っているのだ。
まあ、それはあくまでもう1人の友人を探すという名目で各地を回るついでなのだが。

……　ん？　僕も同伴していたはず？　もう1人の友人ももう居た？
何を言ってるんだ。そんなことは無い。例え空港で何ケ月も3人で放置にされていたifがあったとしてもそれは多分別の世界戦だ。夢でも見てたんじゃない？

は、話を戻そうか。

「お前、金は？　あんの？　仕事ちゃんとしてんの？　無職なのに旅に出るとか計画性のないこと言ってんの？」
「何言ってんだ、オレはこの日のために各地の大会で優勝した時の賞金ちゃんと貯金して計画してたんだぞ？」

へぇー、そうなんだ、こいつがバトル強いこともバトル好きなことも知ってたけど大会出てるんだ。

てか意外。こんな馬鹿なこいつの事だから無計画に……　ん？

「おい、その計画をなんの説明もなしに僕をいきなり誘うつもりだったのか？」
「ああ！　お前は働いて働いてないようなもんだからいつでも行けるかなって思ってな！」

思ってなじゃないよ。お休み期間中ならまだしも僕は立派（？）な社会人になっ「ちゃった」んだぞ？

……　いや僕結構仕事してるからね？　最近は他の四天王さんとも交流してるからね？　よくよくアデクさんにも褒められてるからね？

「とりあえず行けないよ、リンドウだけで行ってきな」

折角楽しそうな話だったのに……。

誘うなら何ヶ月か前からちゃんと計画してからにしてよー。

「リンドウさん、お気を付けて。兄さんはアタシがいつも通りしっかり面倒を見ておきますのでゆっくり楽しんできてください」

そっかー、しょうがないな、なんて残念そうにするリンドウ。

ホントに僕が行けると思っていたのか、なんて思うとなんだが笑えてくるようだ……　あれ？

「シキミちゃん、どうしてそんなに笑顔で送り出すの？　どうしてそんなに嬉しそうなの？」

最近は僕と友人が一緒に居ても嫉妬することはなくなってきてはいたのだが……　旅行となるとまだダメのようだ。

この際、面倒見る云々が真実であれどうであれ今はどうでも良くなる。

「お土産はかなめいしで良いよな」

そんなことは露知らず、呑気に話を進めるリンドウ。

「持ってこれるもんなら持ってこいや」

あれ地味に１００キロ超えてるからね？　あとそれ持ってきたら御霊の塔じゃ無くなっちゃうからあんまり持ってこないでね？
かなめいしだけ持ってこられた所でイッシュでミカルゲになるかどうかも怪しいし。

それよりかは、

「……　割と普通にやみのいしが欲しい」
「……　そんなでいいのかよ」
「そんなのとか言うなよ、大事なものなんだから」

というか意外と無いんですよ。この辺。
売ってもないし、落ちてもない。ダウジングマシンなんて高価なものも持ってるはずもない。

ああ、分かった。なんて納得してくれたようだが。

「あ、そうだ。飛行機の時間までここで話しててもいいか？　何気に久しぶりだから色々話したいことが」

いつの間にかソファーで寛いでしまっているリンドウが提案してきた。
何勝手に座ってんだ。

ああ、良いよ。普段の僕とシキミちゃんなら快くそう言えただろう。

「いや、今日は無理だよ」

だが、今日はちょっとマジで無理なの。

「なんかあんのか？」

だって、

「カトレアさんとギーマさんの就任があるんだもん」

「へぇ」

という事です。

今日、四天王が２人変わるらしいです。

「初めまして、わたしはギーマ。今日から宜しく頼むよ」

チャンピオンと四天王が机に向かって座り、補佐がその後ろに控える会議室。

１人の男が立ち上がりお辞儀をしてから自己紹介を始めた。

彼はあくタイプ使いのギーマさん。鋭い瞳に尖った髪は何処かレパルダスを彷彿とさせる。執事が着るような黒の燕尾服を見に包み、黄色いマフラーを巻いている。

……　長いな、マフラー。床に擦らないのかな？

でもでも生で見るとやっぱりかっこいいね。

レンブさんやアデクさんを見た時も思ったけど、ギーマさんの雰囲気はすごく好きだったから感動がデカい。

前任の四天王さん同様是非とも仲良くしたいね。

……　あ、普通の意味で。

因みに以前の四天王ノーマル使いのアダチさん、はがね使いのベリ

アさんとは結構仲が良かった。
特にアダチさんがよく話しかけてくれていたんだが……。
「ボクはチャンピオンアデクさんよりも長くここにいるんだ。そう簡単に四天王の席を下りるつもりはないよ」
なんて、言ってたけど……うん、まあ、勝負なんてやってみなきゃわかんないもんね。
元気かなー、あの人。中央の柱の裏に自分の名前彫ってたけど、まだバレてないみたいですよ。

「初めまして、皆様。アタクシはカトレア。……　もしかしたら、迷惑をかけてしまうかもしれないけど、一先ずよろしくお願いするわ」
紳士のようなお辞儀をするギーマさんとはまた違ったお辞儀、いわゆるカーテシーがとても似合っている。
彼女はカトレア。少し癖のある長い金髪を背中まで伸ばし、なめらかな白とピンクのフワフワドレスを着こなすお嬢様だ。
本人はまだ語っていないが以前はバトルフロンティアのバトルキャッスルでオーナーを勤めていたカトレアお嬢様。
フロンティアブレーンをしていたのは彼女の傍に控えて頭を下げている紳士なる執事、コクランさん。
だがカトレアお嬢様が四天王としてここに来たということは彼女の超能力云々が落ち着いたのだろうか。まだまだ気の弱いシキミちゃんのようにコクランさん彼女のがメンタルサポートをするのだろうか。
本気でポケモンというゲームに触れたのはサンムーンからなので僕自身の中で関わりの薄い2人だが、今世では違う。
特にカトレアお嬢様の補佐に着くコクランさんは同僚にも当たる

し、仕事の出来そうな人だから仲良くして行きたいな。

……　あ、普通の意味でね？

「2人とも、よく来てくれた。四天王として働いて貰うのは明日からだから今日はゆっくりしてくれ。夜には歓迎会もあるからな」

チャンピオン兼幹事のアデクさんが立ち上がりそう言った。……結構ノリノリですね。

シキミちゃん就任の時も歓迎会はあったのだが、諸事情によりカットさせてもらおう。

「初めまして！　ギーマさん、カトレアさん。アタシはゴーストタイプを専門にしてるシキミです。補佐の兄共々よろしくお願いしますね！」

「お願いします」

シキミちゃんに合わせ頭を下げる。

「うむ、わたしはレンブだ。よろしく頼む。落ち着いたら手合わせを願いたい」

レンブさんも手を合わせ頭を下げる。

その日の夜はアデクさんの言ってた通り歓迎会が開かれた。

初めて会った4人だが話も弾んでいたようなので仲の良い4人になって欲しいと兄ながら思った。

「サフラさん、お互いお嬢様にお仕えする執事としてもよろしくお願いします」

「あ、僕執事じゃないんですよ」

という訳でね、イッシュ四天王ようやく４人揃いました。

第３０話　マジコスサフラ

「さてと、シキミちゃんも挑戦者の相手しに行ってしまったし……暇ですな」
「ラプー…」

シキミちゃんが戻ってくるまで何しようか、と未だに輝石の似合いそうな姿をしている相棒と共にリビングのソファーでだらけていた時にその人はやってきた。

ピンポーン、と玄関のチャイムが鳴る。
起き上がるのが億劫でチラリとテラーを見る。

「…　ラップ、ラプラプ」
「ま、まさかテラーちゃんに頼もうとしてたわけないでしょ？」

見透かされたように言われてしまった。

仕方ない、と重い腰を上げ玄関へと向かい扉を開ける。

「やあ。サフラ君、と言ったかな？　今、少しいいかい？」

相手が誰なのか確認することも無く。

「改めて挨拶を、とも思ったんだが……シキミ嬢はまだ戻ってきてないみたいだね」

真面目な人だな、なんて思っていた矢先、所で・・・ とギーマさんは言葉を続けた。

「・・・・・ 歓迎会の時から気になってたんだが、随分と野暮ったい格好をしているね」

「え？ あー、はい」

つい、当たり障りの無い返事をしてしまう。

僕としてはこの格好を気に入っているし、野暮ったいとも思っていない。動きやすくて寛ぎやすいこの格好の何がいけないというのか。

・・・・・ 確かに見栄えは悪し、もう何ヶ月も着てるからボロボロになってきたし、首と裾のところはヨレヨレで肘のところ穴空いてるかもしれないけど。

だ、大丈夫だよ。毎日ちゃんと洗ってるし。

「そうだ、折角ならわたしのお古を着てみないか？」

「え・・・」

興味の欠片もないように振舞っていたつもりなのだが・・・・・ どうやら僕は演技の才能が絶望的にないらしい。

「ああ、大丈夫だ。お前の背丈にあったサイズだってちゃんとあるし」

「はぁ・・・」

確かに僕よりも１０数センチほど大きいギーマさんであるが、僕は別にサイズを気にしていた訳では無い。

それに何で小さいヤツがまだあるんだよ。

お気遣いは有難いが、僕は今大変忙しいのだ。

うん、忙しいよ。めちゃくちゃ忙しいの。

なので断るための言い訳を必死に考え

「おや、ギーマさんにサフラさん。どうされたのですか？」

そんな時にちょうど悪くカトレアお嬢様の補佐にして執事のコクランさんも部屋の前を通り掛かるもんだから相変わらずの間の悪さには嫌気がさす。

いや、この人達が嫌いな訳では無いからね？

……　あくタイプ使いってのはゴースト的に少し苦手感あるけどね？

ウダウダ脳内で言い訳をしている内に仕事の出来るギーマさんはこれまでの経緯を簡単に説明をする。無駄のないストイックな感じは見習うべきだ。

「そうですね、やはり女性のお傍に控える執事としてはそれ相応の身だしなみを整えるのが望ましいですね」

ほら見ろ、どうするんだ。全く反論の余地が無いじゃないかー。

相変わらずこの人は僕のことを執事だと勘違いしてるけど。

「では行きましょうか」

こう見えて根っからの小心者である僕は、じゃあ、お願いします。と頷くことしか出来ず、ギーマさんの部屋へとコクランさんと共に連行されてしまった。

何の説明もなく部屋に1人残してしまったテラーちゃんが心残り

だが、まあ彼女なら大丈夫だろう。

心の中のテラーちゃんが大丈夫だよ、と呟いた気がした。

「サフラさんは身長こそ高くありませんが、全体的に線が細いので中々に様になっていますね」

何だこの服、服内で動けるスペースも無く、パーカーほど柔らかくない。紳士服になれない僕にとって動きづらいことこの上ないのだが。

「色違いもあるんだよ、ほら。こっちの色なんてシキミ嬢の洋服とあっていていいんじゃないかい？」

あ、それは普通に良いですね。僕そっちが良いです。

……　いや、色違いって言葉に惹かれた訳じゃないよ？

「ほら、髪もだらしなく垂らしておくだけじゃなくビシッとキメれば……うん、いい感じだ」

ヒドイ……　シキミちゃんにすらこんなことされたことないのに……。

「最後に作法の練習です。いいですか？　私めの後に続いてください」

「…　はい」

コクラン先生、女性をダンスに誘うお作法は本当に必要なのでしょうか？

すっかり変わり果ててしまった僕は着替え方やワックスの後処理なんて知る由もなく、クタクタ疲れた様子で部屋に戻

「サフラさん、猫背に戻ってますよ」
「はいっ」

変な癖付いたかもしんね。

色々あったがようやく戻ってこれた我が部屋。
ただいまー、とリビングに向かって声を掛ければソファーでのんびり寛いでいたテラーちゃんが両手をパタパタさせながら近づいてくるのが分かる。
器用に扉を開け、玄関に顔をのぞかせると、

「ラップラー！　…　ラプッ!?」

中々驚いた表情を見せてくれた。

「はは、随分と変えられたでしょー？」
「ら、ラプ…」
「そりゃどうもー」
「ラップ！　ラプラーラプ！」
「いや、着替え方も知らないしもう着ないと思う」
「…　ラプ、ラッププー」
「はいはい、どうもね」

テラーは気に入ってくれたようで褒められたけど、どうにも僕にあっていない気がしてやまない。

改めてその様を見るべく姿見の前に立つ。

何時ものパーカーなど見る影もなく、薄紫と薄い黒に身を包んだ僕がそこにはいた。

体型を隠すつもりだった訳でもないのに着ていたダボダボさんとは打って変わったピシッとスーツ。本物の執事さんが着るような燕尾服はたまたまサイズが合ったギーマさんの私物をお借りしている。

ボタンを外せばいいんだろうけど、シキミちゃんにちゃんと見せるように言われているし、保管方法も知らない。

両目を軽く隠していた前髪は上に上げられ髪の下になってしたお目目が顕になってしまった。ポンパドゥール？　って言うのを意識したらしい。

コチラはワックスで固めたらしいが、ワックスなんて中学生がノリノリで使って酷い目に合いそうな物、1度も触れたことはなかったので溶かし方？　洗い流し方も存じ上げない。

まあ、なんか様にはなってるけど中身が僕なだけにね。パチモン感が凄い。

衣装チェンジの仕上がりを見て貰うわけでも、どうにかしてもらう訳でもシキミちゃん待ちなのだ。

パーカーほど柔らかくは無い燕尾服に引っ張られながらソファーでくつろい……　全然くつろげない。

腰掛けていると、四天王の部屋に繋がる通路から物音。

そしてただいまー、と聞きなれた声。

よっこいせ、と立ち上がりそこへと向かい、扉を開ける。

「あ、兄さん、ただいま。今日も勝てま」

靴を脱いでいたシキミちゃんは僕の姿を一瞥した途端変な顔のままその動きを留めたが、まあこの格好が気になるのは僕も同じだから。それだけやれば終わりだからさっさとやらせてよ。

より美しく見せる動作と教えこまれた事を思い出し、シキミちゃんを出迎える。

「お帰りなさいませ、シキミちゃん。本日もお仕事、お疲れ様でした」

左手を軽く胸に当て、右手は背中に。胸は張り、指も真っ直ぐ伸ばす。

上半身だけを３０度程度曲げるお辞儀、背筋は伸ばしたまま。

うん、多分良いはずだ。

僕は顔を上げ、腕を下ろした。

あのさ、シキミちゃん。

「……」

「……」

僕がこんなことするのは驚きなんだろうけど、小一時間くらい無言で動かないまま無視するのはやめてくれない？

それより解せないのはこれが僕の正装となってしまったことだ。
なぜだ。